
パラダイス・パラダイム

とーち

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

パラダイス・パラダイム

【Nコード】

N54330

【作者名】

とーち

【あらすじ】

停滞する日本、混乱する世界との境界となつたお台場で、薬物によつて異常な攻撃力を得た娘、切子が、抗する者を斬る。敵はカルト教団ラブ・ファクトリー、教祖犬丸率いるキメラ軍団。その一人ナツは、唯一切子にシンパシーを感じていた。切子は、美青年達が收容され、そのプライベートを撮影する映像を制作しているスタジオに助けに向かう。それは一見のどかな番組だが、その実、彼らが最後に虐殺されることを目玉にしているハードコアプログラムだ。放送を見た切子が駆けつけた時、生き残っていたのはコータとリュ

ウの二人だけだった。スタジオ脱出を試みる切子達に、百人以上の化け猫集団が襲いかかる。見事な刀さばきと爆弾で危機を脱した切子の前に、キメラの中でも能力の高い、ハル、ナツ、アキが立ち塞がる。

序章

棺桶に似た横長のビルから脱すると、夜のとばりがおりていた。

陸風に遊ばれ、切子きりこの散切りの髪がばさばさと揺れる。仰ぎ見ると、まばらな星が、ぼんやりとした夜空に張り付いていた。初夏の潮の匂いに鼻先をくすぐられ、一つ小さなくしゃみをする。遠い昔はお台場と呼ばれた埋立地《境界》で、彼女は生きていた。

ここでは日が暮れると、ほとんどの灯りが消えてしまう。だが、海峡を隔てた《東京》の街は煌々と輝き、夜空に篝火を焚き上げている。そのせいでこの街では、ろくに星を見ることができないのだろう。

二年ほど前まで、向こう岸の二級市民でテロリストだった切子は、双子の片割れが死んだことで、一級市民としての権利を得た。それがため、捕らわれた仲間の中でただ一人死刑を免れ、この《境界》に永久追放となった。

ここは、日本と世界の境界で、無法地帯だ。今彼女は、東京が臨める岸边に沿って延びる道を歩いている。立ち止まり、振り返ると、さっきまでその中にいた廃墟に近い建造物が、闇よりもなお黒く、巨大な影を落としていた。

不気味な景色だが、この街は真夜中が一番いいと切子は思っている。夜が明けて、太陽の光で照らされると、いかにここが荒んだ状態にあるか、一目でわかってしまう。過去は商業地だったこともあるというこの場所には、その頃に建てられたビルが、風雨にさらされるがまま、無残に放置されていた。

切子は海岸に出ることにする。この街と東京との間に横たわる海が見たくなった。

その時背後から、早足に近付いて来る何者かの気配を感じた。切子は全身に殺気を漲らせ、臨戦態勢をとって振り返る。この街では、いつ命を落としても不思議はない。

「待つて」

攻撃を留めようとするその声で、自分を追って来たのが誰か悟った。腰にぶら下げた刀の鞘に手を置いたまま応える。

「何？」

「一緒に行く」

小走りで、薄闇でも顔がわかるほどの距離に近付いてきたのは、ナツだった。露出度の高い、鉾や鎖で装飾された赤いキャットスーツを着ている。その曲線は同性である切子が見ても、なかなか悩ましいものがあつた。

「何で？」

訝しげな視線を向けてやる。だが怯む様子も無く、ナツは鮮やかな微笑みを浮かべた。自分が十分美しいということを知っている者にしかできない、自信に溢れた表情だ。

「だって、私は今まで、一人で生きたことが無いから。この状況に慣れるまでは、よく知っている人間の側にいた方が身のためでしょ？ 私みたいなのが一人でいると、色々と面倒なことに巻き込まれると思うのよ。できれば煩わしいことは避けたいの。それに、私の世話を焼く義務が、あなたにはあると思うし」

「何でよ！？」

「だって、あなたのせいで、パパを裏切るようなことになっちゃったじゃない」

「あんた結局、犬丸を逃がしたでしょうが」
いぬまる

「だけど、あなたの肩を持った私は、コミュニティに戻っても裏切り者の烙印を押されてしまう。私はあなたのせいで居場所を失ったのよ」

ぬけぬけとしたその言い分が心底腹立たしい。それと同時に、切子は深く後悔した。こうしてナツに付き纏われる羽目になったのは、結局全部自分の行動のせいなのだ。

そう、事の始まりは、数時間前に遡る。

序章（後書き）

初投稿です。

これからコツコツ投稿していきます。

切子、救出に向かう

切り裂かれる喉の白と、噴き出す真つ赤な血の色の対比が、薄暗い照明の下で鮮やかに浮揚している。ささくれた心を、酒といい男で癒そうと、軽い気持ちでいつもの店に寄った切子の前で展開されているのは、おぞましく残忍な殺人の光景だった。

壁一面に映し出された画像の中で、つぶらな瞳の愛らしい顔をした少年は、無慈悲な死神に捕えられ、そのあえかな命をはかなく散らそうとしていた。彼は髪の毛を掴まれ、晒された喉に月鎌の湾曲した刃を掛けられても、顔を強張らせるだけで、叫ぶことさえできなかった。

絞められた鶏のように易々と首をちょん切られて、切り離された肢体が床に崩れ落ちる。死神の手にぶら下がっている頭。その切り口からどろどろと血が滴り落ちて、ここまで腥い臭気なまぐさが漂ってくるようだった。目を覆いたくなる酸鼻を極める光景。それでもその画は、蠱惑的で美しい悪夢を表現したビデオアートのようでもあった。そう見えてしまう理由は、おそらく彼らの容姿のせいだろう。同情心を煽るのにお誂え向きの美貌を持つ、殺される者。そして、トロフィーでも掲げるように生首を誇示している殺す者は、嫌というほど醜いものを見てきた切子でも、目を見張ってしまうほどの異形の持ち主だった。

殺戮者は、黒光りするボディースーツを身に着け、均整の取れたしなやかな女の身体を持っていた。だが、その首の上に付いているのは、悪鬼を思わせる不気味な顔だった。額が前に迫り出し、鼻はつぶれてへこんでいる。出っ張った目玉には白目が無く、肌は乾燥する土くれのようにひび割れ、断層に似た口は耳近くまでぱっくりと裂けて、矢尻のごとき犬歯を露わにしていた。それは、人の体の上に醜悪な化け猫の首を繋ぎ合わせたのかと思わせるような、グロテスクな姿だった。

「悪趣味なショーだな」

カウンター越しに画面を睨んでいた髭面の中年男が、吐き捨てるように言った。寂しく閑古鳥が泣く居酒屋の、強面の店主だ。奥行きのある店内には、客が二人しかいない。両人とも店主前のカウンター席に陣取り、体を捻って背後に映写されている画像を見ている。通路を挟んで小上がりになった座敷席の、奥の壁に映った映像だ。

一方は小柄な若い女で、それが切子だった。二席置いて彼女の右隣には、ビヤ樽のような体をした肥満男が座っていた。《境界》ではそれなりに名の知れた武器商人だ。

三人が視線を奪われているのは、切子のお気に入りテレビプログラムだった。店に來ると、居合わせた他の客に嫌な顔をされようが、いつもお構いなしでプロジェクタを使って壁に映している。本当なら、お洒落な服を着た美男子達が、お洒落なインテリアの中でくつろいでいるだけの、平和で退屈な光景が映し出されるはずだった。

映像はクローズアップからロングショットに変わり、まだ惨劇が終わっていないことを視聴者に見せつけた。獣面人身の怪物は一人だけではなかった。コピーしたのかと思えるほどそっくりな異相をした女が四人、別の獲物を捕え、その手足を一本ずつ持って磔のように床に押さえつけていた。

カメラが新しい犠牲者の顔をアップにする。涼しげな面差しをしていて、平時ならきつと爽やかな笑顔を見せてくれそうな、人好きのする容姿をした少年。だが、既に抗う氣力を失くしてしまったのか、人形のような虚ろな目で天井を見上げていた。

そして、画面の中にもう一人の女がフレームインする。それはさつき、つばらな瞳の少年の首を切り落した女なのか、手に持った月鎌に血が滴っている。女は、少年の頭頂近くで軽く腰を屈めた。微塵のためらいも感じさせず、月鎌が振り下ろされる。少年の額に深々と刃が突き立てられた。

月鎌が引き抜かれ、ぱっくりと開いた額から、真っ赤な血がどく

どくと溢れ出る。少年の整った顔が塗り潰されていく。彼の生きていた時間など、爪の先ほどの価値も無いとも言つかのように。

唐突に切子が立ち上がる。両目に被さりそうに長い前髪を片手で払い、ところどころ擦り切れた軍用ズボンの尻ポケットから、銀色のシートを一枚取り出した。その中の錠剤を、両手の親指と人指し指で挟んで、カウンターの上に押し出す。全部出し切ると、十錠ほどまとめて口の中に放り込み、酒で流し込んだ。

「ほどほどにしとけよ。長生きできないぞ」

店主が呆れた口調で言う。

切子は鼻を鳴らして、「元々生きてる方が不条理だ」と、返答した。

「この街で大人しくする意味なんて無いことを悟った。それに、飽きた」

「好きにすればいいさ」

店主が肩を竦める。

「あれ出して」

「はいはい」

諦め顔で腰を屈めた店主が、カウンターの下を探る。立ち上がった時には、光沢のある赤い布で包まれた、メートル弱ほどの細長い棒状のものが手に握られていた。

「ほれ」と、切子の目前に突き出す。

「サンキュ」

口先で礼を言っただけで受け取り、切子は布を解く。出てきたのは、黒い鞘に入った小振りの刀だった。それをベルトに通し、腰に下げる。

「そっちも」

今度は肥満男に向かい、掌を差し出した。

「お前なあ、前の分の金払ってないだろうが」

と、嫌そうに鼻に皺を寄せた相手に、切子は少しも悪びれず言い放つ。

「私が派手に動けば、宣伝になってあんたも儲かるじゃない。ケチ

ケチするな」

渋々といった態で、肥満男はゆっくりと体を屈めて手を伸ばし、床上に置かれていたズタ袋を持ち上げる。膝に乗せて袋を開け、その中から品物を取り出した。黒光りする銃と、ヒップバッグと一体化したガンベルトだ。銃をホルスターに入れてから、切子に向けてベルトを放り投げる。

「ほらよ一式。お前、こっちはあんまり使わないくせに」

重量感のあるそれを軽々と受け止め、腰に巻き付けながら、切子は人悪く左の口端を上げて微笑む。

「飛び道具はあるに越したことはないんで」

肥満男がわざとらしい溜息を吐く。

これっぽっちも気が咎めている様子もなく、「じゃ」と、軽く手を挙げて、切子は出口に向かう。

「お前の活躍をここで見ているよ」

店主の声に振り返る。

「放送事故になるでしょ。しばらく静かにしていた分、派手にやらせてもらう」

切子は、百戦錬磨を思わせる不敵な笑みを唇に乗せた。そして、ちらりと壁に映る映像に視線を走らせる。次の犠牲者の命が露と消えようとしていた。不快そうに眉根を寄せて、早足で通路を突っ切る。切子は、不穏な者達が潜む外界に続く、軋む引き戸を開けた。

挿話 一

【一日目】

彼が目覚めた。

本当は、このプランにはあまり気が乗らなかった。だが、《オリジナル》の希望を叶えないわけにはいかない。それが、自分が存在する意味なのだから。

仄暗いフロア、黒ずんだ臙脂色の絨毯の上に、彼は寝転がされていた。ひしめくアーケードゲーム機の中の一つ、その足元に寄り添うようにして。

まだはつきりと覚醒してはおらず、疑うことを知らないガラス玉のような瞳は、虚ろな色を残していた。それでも、異変を感じ取っているのだろう、しきりに頭を動かして、周囲の様子を探っている。右肘で支え、上半身を起こす。だが、すぐに頭痛が走ったようで、左手の人差し指でこめかみを押さえた。

「やっと起きたか」

彼はびくりと体を震わす。

声をかけたのは、私がファーストと呼んでいる男だ。背が高く、肩幅が広い。どんな奇抜なデザインの服でも着こなせる印象的な容姿をした、このグループのリーダーだ。

彼は、突然現れた男の整った顔立ちを、不審げに見上げて問う。

「誰だ？」

ファーストは微笑み、名前を名乗る。精悍な外見に似合わない、間延びした声だ。

それを合図にするかのように、ゲーム機の間から若い男達が順々に顔を出した。このグループは、これから彼も含めて十人の集団になるが、その内の半分がこの場に集まっている。残り半分は、新入りになど興味を示さない連中だ。

各々彼に近付いて事務的な態度で名を述べ、すぐに引込み、ファーストの横に付く。五人の青年達が彼を取り囲み、見下ろすような並びになった。思わぬ事態に驚いたのか、彼の大きな目が見開かれている。強張った皮膚の下に、恐怖がちらついているのが感じられた。

「あんた達は何者だ？」

乾いた声で彼が聞く。

ファーストが片頬を上げた。

「お前まだ、半分寝ているな。もう一度目を閉じた方がよさそうだ。次に目覚めた時には、そんな質問しようとは思わないだろうよ」

彼は眉間に皺を寄せる。ファーストの言葉の意味を探ろうとしているのか。だが、その努力は無駄に終わるだろう。今の彼に、その答えを得ることはできない。彼は、まともに働かない愚鈍な脳味噌に苛立っているのか、額の中央に人差し指を当て、顰め面をする。

「頭もだが、体もまだ重いんだろ。こうして俺達がわざわざ顔を見せに出向いているのに、立ち上がるうともしないんだから」

その口調には、挑発の響きが含まれていた。彼は、きれいな紡錘形の眼をきつく尖らせ、目前の男を睨み付けた。意に介さず、ファーストは薄笑いを浮かべる。

「もう就寝の時間だ、俺達もこれ以上起きてはいられない。お前は、今夜はそこで寝ろ。明日目が覚めたら、まともに動けるようになっていよう」

「ここはどこだ？」

相手が言い終わるのを待たず、彼は問い質す。ファーストが冷ややかな視線を注ぐ。

「それも明日聞け。お前が明日、その疑問を思い出せばだけどな。だから、今は大人しく目を閉じろ」

その言い渡しに呼応するかのように、薄明かりが次第に闇へと変化していく。そして彼のいるフロアは、いつの間にか微かに誘導灯が灯るだけの暗黒に包まれた。

意識の抵抗も空しく、彼は眠気に囚われていった。瞼がそろそろと眼球を覆うと、上半身を支えていた腕の力が抜け、がくりと体が床に落ちる。落下の衝撃にも彼は目覚めず、腕を額に敷いたうつ伏せの体勢で、深い眠りに入り込んでいく。

少し離れた場所で、さっきまで彼を取り囲んでいた青年らもまた、眠りに落ちていた。床の上で手足を投げ出して熟睡する姿は、糸の切れた操り人形を思い起こさせた。

コクーン

コータは、この絶望的な状況の中で、自分が意外と落ち着いていることに驚いていた。この局面ははつきり言って、これ以上が無い桁外れの危機だった。今、確実に己の命が危険に晒されているのだ。それなのに、大して恐怖を感じていないような気がする。

不思議になって、右頬を右手の親指と人差し指でつねってみた。痛い。実感はある。やっぱり夢を見ているわけではなさそうだ。だとしたらこの現実感の無さは、冷静になっているというわけではなく、あまりの恐怖に感情のリミッターが壊れて、正常な感覚を失くしているのかもしれない。

「何してるんだ？」

隣のシートに座っているリュウが、馬鹿にしたような含み声で聞いてきた。

コータは返事の代わりに、小さく鼻を鳴らした。まったく、こいつとこんな密室で肩を寄せ合う羽目に陥るとは、と、神様にでも悪態を吐いてやりたい気分だった。リュウは、何かにつけてコータにからみ馬鹿にしてくる、腹立たしい奴なのだ。

二人は今、体感型の巨大ゲーム機の中にいる。クラシックな航空機に似せて塗装された、銀色の筐体の側面に設置された階段を上がり、上部に取り付けられた円蓋状の扉から中に潜り込んだ。内部はコックピット風に造られ、操作パネルとモニターの前に、ドライビングシートが二台並んでいる。扉を閉め切ってしまうと、プレイボタンを押さない限り、中は真っ暗闇だ。それでも、しばらくすると目が暗さに慣れ、それなりに周囲の様子が見えるようになる。

穴蔵と変わらないここを、避難場所に選んだのはリュウだ。コータは今になって、何故自分がこの男の後に大人しく付いて来たのか、不思議になった。多分、突然襲ってきた絶体絶命のピンチに放心し、まともな判断力を失ってしまっていたのだ。そうでなければ、ずっ

と嫌ってきたリュウの指示に、素直に従うはずはない。

コータは、その時の愚かな自分を罵りたくなかった。ここは静かで潜んでいるだけなら悪くない場所かもしれない。だが、敵から逃れたいという本来の意図的には、大きな問題がある。だって、見つかってしまったら、逃げ道がまったく無いのだ。ゲーム機の周りを敵に取り囲まれたりしたら、それで一卷の終わりになってしまう。

だが、今となっては、別の場所に移るのはもっと拙い手のように思える。だって、なんだか、すぐ側を敵がうろついているような気がするのだ。本当は、こんな鉄の壁に囲まれた窓一つ無い室房の中にいて、外の様子などわかるわけがなかった。だが、暗闇に潜み続けていたせいで、恐怖心が膨張し、身動きが取れなくなってしまっている。

そんな訳で、気に食わない男と一緒に袋の鼠になってしまったコータは、災禍が自分に気付かずに過ぎ去ってくれることを願い、息を詰めてひたすらじっとしているしかなかった。恐怖を紛らわすため、仕方が無いので、自分の境遇について考えてみることにする。

コータは、自分がいつからここにいるのか思い出せない。数ヶ月程度のような気もするし、気が遠くなるような長い年月、ずっと閉じ籠っているようにも思える。それから、何のためにここにいるのか、その理由もわからない。何で自分はこの息苦しい世界に、ただ大人しく納まっているのだろうか。それは、かなり奇妙なことだとは思う。自分は確かにここにいるのに、それが何故なのかわからないなんて。だが、答えを追求する気力さえ湧かないのだ。

コータ達は、自分達が寝起きをしている、コンクリートと合成樹脂でできたフロアの上下二階に、《コクーン》という呼び名を付けていた。横に延々と長い空間で、狭くはないが、そこだけで暮らしていくには決して広くも無い場所。仲間から聞いたところによると、ここは昔、賑やかなショッピングモールだったらしい。

確かに、往来が許されているツーフロアだけでなく、その上にも

下にも階段が続いているところを見ると、コクーンを内包する建物自体は、かなり大きな建造物なのかもしれない。無論、その内部に籠り、外に出ること許されないコート達に、真相がわかるわけはないのだが。

コクーンは、幾つものブースに分かれて生活空間になっている上階と、だだっ広い食堂と浴室がある下階で成っている。目に見えないシールドで区切られたブースの中では、それぞれ十人程度の男子が寝起きを共にしていた。部屋の割り当ては決まっていて、勝手に移動することは許されない。それから、自由時間と食事とシャワーの時以外は、ブースから決して出てはいけない。この二つが、ここで暮らすための大まかなルールだった。

制限はあるが、実際居心地はそれほど悪くなかった。いつも過ごしやすい温度と湿度に空調が調節されているし、食事もたっぷり与えられて飢えることもない。衣服に関しては贅沢なほどで、シャワーの後に、隙無くコーディネートされた服に着替えるのが日課になっている。自由時間なら娯楽室に行つて、ゲームや読書に興じることもできるのだ。

けれどももちろん、薔薇色の暮らしというわけではなかった。ここには、変化が無いのだ。窓が一つも設置されていないから、外の様子をすることはできない。朝も昼も夜も無く、照明が明るくなったり暗くなったりすることで、起きなければいけない時と眠らなければいけない時を示される。時折時間が止まっているのではないかと勘繰ってしまうほど、閉塞感に満ちた退屈な生活ではあった。

そんな生温かい空間に閉じ籠っていた自分達は、羽の生えない芋虫と同じ、無用な存在と言えるだろう。だからコート達は、この場所を皮肉って、中で虫がうねうねとのたうっている繭　コクーンと呼んでいたのだ。

考えれば考えるほど、コートは自分の置かれていた状態が不可思議になってきた。一体何だつてこんな空間があつて、何人もの若い

男達が共同生活をしているのだから。もし、上手く逃げおおせることができる、もう一度あの暮らしに戻るものがあつたら、今度こそその疑問の答えを追及したいと思う、絶対に。だが、現実から目を背けていられたのは、そこまでだった。

じつと息を潜めていたコータの耳が、か細い悲鳴を捉えた。頑丈な鉄の囲いにさえ遮られることなく聞こえてきたそれは、断末魔の声だ。

コータはビクリと震える。また誰か、仲間が一人殺られたのだ。否応なしに、今自分がどういう状況に置かれているのか、逃れられない絶望的な現実がのしかかってくる。封じ込めていた恐怖が湧き上がる。心臓が激しく脈打ち、全身から冷たい汗が吹き出た。喉が渇き、呼吸が速くなり、無意識に犬のように舌が出ていた。

恐怖に耐えられず、生きたいと願うことなどやめて、外に飛び出し、喚き散らしたい衝動が込み上げる。こんな、感情が極限まで引き摺り出され、自分という存在の際が見えるような体験は、生まれて初めてだった。

「怖いかな？」

不意に、暗闇にぽつりと落とされた低声に、コータは驚く。

「お前、やっぱり震えているよな？」

「うるさいっ」

揶揄するリユウに苛立ち、コータは思わず大声を出してしまった。慌てて両手で口を押さえる。ついさっき、恐怖に搦め捕られているこの状況を、壊してしまいたくなっただけなのに、声を発した途端、凍るような畏怖に足を掬われてしまう。本当は、見つかるのが恐ろしくて仕方がないのだ。

コータは必死で耳をそばだてる。足音や話し声など、誰かが近くにいるような物音は聞こえない。決して危機が去ったというわけではないが、少しだけ胸を撫で下ろす。

そして、虚勢を張る意味もあって、コータは小声でリユウに話しかけた。普段ならできるだけ口をきかないようにしている相手だが、

異常な状況を前に、さすがにそんなことは言っていられなくなってきた。

「あいつら、何者だ？」

今一番知りたいことを聞いてみる。コータ達は、いつものように一日を遣り過ごしていた退屈な午後、突然恐ろしい敵に襲われたのだった。前触れも無く現れた殺人者は五人。月鎌を手に髪を振り乱し、手近にいた者を捕らえ、その刃を振り下ろしていった。あんな恐ろしい面相をした女達を見たのは、コータは生まれて初めてだ。

「イベントが発生したんだろ」

リュウが答えた。

「イベント？」

意味がわからなくて、続く言葉を待った。だが、いつまで待ってもリュウがその先を述べることはなく、暗闇がしいんと響くだけだった。

コータはふん、と鼻を鳴らす。この腹立たしい男がブースのリーダーだつていうのだから、コクーンの人材不足はまったく酷いものだと思う。生き残ることができたら、ぜひとも大胆な改革を要求したい。もちろん、そんなことができるようになる見込みなんて無いわけだが。

「もうみんな殺られたのか……」

いつもの皮肉めいた口調とは違う重く沈んだ声で、唐突にリュウが呟いた。考えないようにしていた仲間の顔を、コータは思い浮かべる。女達の襲撃で、ここが悲惨な処刑場と化してから、きつとまだ一時間と経っていない。その直前までこの場所は、くだらない雑談やゲームで時間を潰すしかない、死ぬほど退屈だが、無害な、平和なところだったのだ。

コータはこれまで、虚しく流れる時間を共に遣り過ごしてきた仲間達に、特別な情愛を感じたりしたことはなかった。だが今は、逃げ道のない鳥籠のようなこのブースの中で、鋭い爪を持つものに狙われ、惨たらしく羽を散らすしかない彼らに、できれば生き延びて

欲しいと、真摯に願っている。それは、生命の危機を前にしてようやく持つことができた、仲間への労りだった。

また何か聞こえてきた。コータは息を詰める。悲鳴よりもよく響く、甲高い金属音。何か硬いものと硬いものが、ぶつかり合って生じる音だった。

それは、僅かな間隔を置いて幾度も聞こえ、次第に大きくなっていく。もしかしたら女達は、筐体を鎌で叩き、中に隠れている獲物をうさぎのように追い立てるつもりなのかもしれない。

これ以上ないくらい怯えているのに、恐怖はそれでも際限なしにどんどん増大していく。心臓が早鐘のように激しく鳴る。その音のせいで、この場所を見つけられてしまうのではないかと思うほどだった。

金属音は、確実に近付いてきていた。コータは思わず、隣に座るリュウの太腿を右手で掴む。耐え難い恐怖のせいで、どんなものにも縋りたくなっていた。驚いたのか、リュウは一瞬身動きしたが、何も言わなかった。

すると、痛いほどに耳障りだった金属音が、突然消えた。

コータは体を強張らせる。再び戻ってきた静けさの中で、次に起こる何かをただ待つしかなかった。

唐突に、大きな音が鳴った。カン、カン、と、高く響いて聞こえる。それは明らかに、ごく近くの場所から聞こえてきていた。規則的に続くそれは、どうやら誰かの足音のようだ。

それがどういふことか、コータは瞬間的に理解した。ゲーム機に乗り込むための階段を、何者かが昇っているのだ……！

コータは頭が真っ白になった。なぜだか笑い出してしまいそうだった。リュウの脚を掴んだままの手が、力が入り過ぎてぶるぶると震えた。

足音が、頭上で止まる。

重いものが動かされる音と共に、暗い室内に光が差す。コータは瞬きをし、ゆっくりと首を回して背後を見る。

天蓋が開けられていた。

化け猫のような女の顔が覗く。

耳まで裂けた口がにたりと開かれる。その内側の毒虫を思わせる赤い色が、コータの網膜に張り付いた。

形容しがたい恐怖が背中を駆け昇っていく。金縛りにかかったようになり、コータは身動きできなくなった。

女の片腕が伸びてきた。コータは、これですべて終わりだと思う。心の中で、誰に伝えるでもない遺言を呟いた。さようなら、泡みただった人生。最期がこんな酷い結末だなんて思わなかったけれど……。

コータが死を覚悟した刹那、何かがぶつかったような重低音が、外から聞こえてきた。

猫女が振り返る。

すると、なぜか急に天蓋から消えた。足音が聞こえる。どうやら階段を下りていったようだ。

コータの唇から安堵の溜息が漏れる。もちろん、恐怖は過ぎ去ったわけではなかった。それでも、ほんの少しだけは寿命が延びた。

「何だ？ 何かあったか？」

リュウが小声で自問する。鈍い音と、鋭く乾いた高い音が混じり合って聞こえてきた。

「コータ、ちょっとお前、あそこから首を出して覗いてみるよ」

明らかにからかっている口調で、リュウが頭上に開いたままの穴を指差す。

「嫌だっ」

コータは、いつにもましてきっぱりと撥ね付けた。今すぐ誰にも気づかれない道端の石にでもなりたい気分なのに、そんな敵に目を留められかねない行為をするなんて、冗談じゃなかった。

「あっそ。しょうがない、俺が見るか」

リュウは立ち上がり、シートの後ろに回って、天蓋に繋がっている短い梯子を登った。

「お、おいっ」

馬鹿なことはやめさせようと、コートは慌てて後を追う。ためらいなく穴から首を出そうとしているリュウのシャツを、背中から引っ張った。平時なら、こんな風にこの男の身を案じるようなことは絶対にしない。非常時だからこそその気遣いだというのに、相手は、そんなこっちの歩み寄りに折れる気配もない。

「えっ？ 何だあいつ？」

表に顔を出した途端、リュウが吃驚する。

「コート、お前も見てみる」

そう言って振り返り、片手を伸ばしてきた。

「よせっ。俺はいいっ。いいんだっ」

引っ張り上げようと二の腕を掴んでくる手を、コートは慌てて払い除ける。リュウのことは、ずっと嫌な奴だとは思ってはいたが、どうやら考えていた以上に無神経な男だったらしい。コートには、あんな恐ろしい死神のような奴らを、わざわざ危険を冒してまで見ようとする気持ちかわからなかった。自分の勇ましさを見せ付けるつもりなのか、あるいは、まともな恐怖心が無いのかもしれない。何にせよ、そういう無茶は他人を巻き込まず、一人で勝手にやればいいのだ。

まあ確かに、危機はもうすぐ近くまで迫ってきていて、それがちよっと先に延びたとしても、大した差は無いかもしれない。それでも、恐怖を目前にして開き直るようなことをしたいとは、コートは思わなかった。

だからシートに戻り、体を縮こめ、しっかりと耳を塞いだ。リュウが喚き続けている表の状況の描写が、聞こえたりしないように。「終わったぞ」

そして、不意に肩を叩かれ、コートはびくりと顔を上げ、振り返った。いつの間にか梯子から下りていたらしいリュウが、シートの後ろに立っていた。どれほどの時間が経ったのだらう。おそらく十分ほどではないかと思うが、よくわからない。

「終わったのか……」

リュウの言葉を最期の宣告として受け取り、コータは絶望する。とうとうあの月鎌の鋭い刃にかかり、首を切り落とされるのだ。

「そこで見ていた奴いたよね！？ 生き残り？」

出し抜けに、外から耳慣れない甲高い声が聞こえてきた。異形の女達だろうか。一言も声を発さずに襲ってきたので、喋れないものだと思い込んでいたのだが、そうではなかったのか。

リュウがその呼びかけに反応し、梯子へ向かう。

「おいっ」

一応引き止めてはみたが、コータはすでに諦めの境地に入っていて、どうにでもなれという投げ遣りな心持ちになっていた。

穴から顔を出し、リュウが答える。

「そうだけど。あんた何者？」

「私はただの物好き。名前は切子。あんた一人？」

「もう一人いる」

勝手に外の女と会話して、勝手に自分のことまで知らされてしまつても、コータはもう脱力するだけで、腹も立たなかった。

「じゃあ、生き残りは二人か」

「何人残っているかは知らないよ。俺は、今俺の足下にいる奴と、成り行きを見ずに逃げたから」

「七人死体を確認した。ここのグループは九人でしょ？」

「そうか……」

リュウが呻くような呟きを洩らす。だが、すぐに気を取り直し、質問を重ねる。

「ところで物好きって何？ あんた敵？ それとも味方？」

「さあ？ でも今のところ、あんた達が助かる道は、私に付いて来るしかないさそうだけど」

助かる？

コータの怯える心が、微かな希望に反応した。

「助かる？ 俺達が？」

リュウが馬鹿々々しいと言いたげに繰り返す。

「そう望むなら、付いて来なっ言ってる」

「突然現れた、正体のわからない女にか？」

リュウの口調は、明らかに相手に疑念を持っている。

コータは慌てて立ち上がった。このままだと、たった一つの生き残るチャンスを潰されてしまうかもしれない。毛筋ほどの可能性だったとしても、今は縋り付かないわけにはいかないのだ。

脇から無理矢理足を引く掛け、コータはリュウを押し退けて梯子をよじ上り、穴から外へ顔を出す。

「助けてくれるのか！？」

大急ぎで会話に割り込む。

その時、コータの目に周囲の様子が映った。思いも寄らない状況に、すぐに絶句してしまう。

彼らが身を潜めていたのは、所狭しと大型アーケードゲームが並ぶコーナーで、内装はシルバーを基調にした無機質なものになっていたはずだ。それなのに今は、塗料をスプレーで派手に撒き散らしたかのように、赤く染まっていたのだ。

隠れていた筐体の側に一人の若い女が立ち、こちらを見上げている。異形の死神達とは違い、至って普通の容姿の女だった。のつぺりとした特徴の無い顔立ちで、一度会ったくらいでは記憶に残らなさそうだった。

だが、平凡なその女の足下に、肩から斜めに切り裂かれて、臓腑をはみ出させている屍が一体、転がっていた。それは確かに、コータ達を襲ってきた異形の女の一人だった。恐ろしげな顔を上に向け、眼をかつと見開いて、天井を睨んでいる。

コータは、グロテスクな死骸に思わず視線を逸らしてしまう。すると、他にも床に倒れている者がいるのが目に入った。見渡してみると、コータ達を襲ってきた化け猫達が、五人全員血を流して動かなくなっていた。

若い女は、赤く染まった白いＴシャツとカーキの軍用ズボンを身

に着け、手には血糊でぬらぬらと光る小振りの刀を握っていた。何の力も無さそうなこの小柄な女が、あの残忍な化け物達を倒してしまったのかと、コータは夢でも見ているような気持ちになった。

「あんたは……」

コータは、言葉を継ぐのが恐ろしくなった。もしかしたら自分は、猫女達を凌ぐ化け物に助けを乞おうとしているのかもしれない。

「助かりたいなら、私を信じるしかないんじゃないの？」

女がにやりと笑う。

自分の前に示された希望の光は、ほんの微かなものなのだという
ことを、コータは受け入れるしかなかった。

挿話 二

【二日目】

ぼつりぼつりと蛍火のように、小さな誘導灯だけが点っていた薄闇から、少しずつゆつくりと照明が明るくなっていく。それがこの世界では、朝が来たということだった。

彼がぱちりと目を開けた。昨晚とは違う、すっきりした顔をしていた。硬い床から身を起こし、立ち上がる。そして、自分が横たわっていた通路の両脇に、様々な大きさ、形、彩色の機械が、みつしりと並べられている風景を、物珍しそうに見た。

彼が入られたブースは、施設の居住スペースの中で一番広い。年代もののアーケードゲーム機が、過去を模した博物館さながら、おびただしいデータ付けられ、今なら使われそうもない派手な色や不揃いな形が、アンティークな雰囲気醸し出しながら、ごちゃごちゃとひしめき合っていた。数人同時に遊べる巨大なゲーム機もあれば、一人用の小さな筐体もある。それらの機械類が、平坦なフロアに楽しい表情を与えていた。

彼は視線を下方に移す。数メートル先の床に、数人の青年達が動かない人形のように寝入る姿があった。昨晚、彼の前で名乗った男達だった。どう見ても寝衣ではない普通の服を着たまま、ゲーム機に寄り掛かったり、床に転がったりしている。ここには、ベッドや寝具などは無い。空調を備え、食事を与えて、生活リズムを整えてやれば、それ以上快適な環境は必要無いと考えられているのだ。

次に彼は、きよろきよろと周囲を見回した。顔を上向けた時、何か不審なものを見つけたのか、眉間に皺を寄せた。

視線の方向から、自分を映しているカメラレンズの存在に気付いたのだと推測する。ブースの天井には、黒いドーム型のカメラが、規則正しい水玉模様状にびっしり並んでいるのだ。三百六十度全方

向に回転するレンズが、彼の姿を捉えていた。

天井だけでなく、ブース内には、床にもゲーム機にも、至る所に数え切れないほどのカメラが取り付けられている。青年達の姿を、漏らすことなく撮影するために。だが、そのほとんどは、どこに設置されているのかわからないようになっていて。せつかく整えられた舞台装置内にそんなものが見えては、演出が台無しになってしまうからだ。

彼はしばらくの間、じつとカメラを見上げていた。何かが思い出せそうで思い出せない、そんなもどかしげな表情で。

立ち尽くす彼の前に、眠りから目覚めた男が一人、近付いて来ていた。

「随分すっきりした顔をしているじゃないか」

不意を打たれ、彼はびくりとする。声を掛けてきたのはファーストだった。

驚かされた彼は、腹立たしげに目の前の男を睨む。だが、向こうは気にかける風もなく、頬に皮肉な笑みを乗せて、近くの筐体に寄りかかっている。

「代わり映えのしない一日の始まりだ。俺は一応グループリーダーだから、お前にここの流儀を教えてやる」

その口調は高圧的だった。彼は不快に感じたらしく、きつく眉を寄せた。だが、ファーストは態度を改めるつもりなど毛頭ないようで、同じ調子で喋り続ける。

「もう大丈夫だな？ さっさと行くぞ」

「行く？」

怪訝そうに彼が聞く。

「こんな場所にだって、メシとフロくらいはあるさ。急げ。他の奴らは、お前が馬鹿みたいに天井を見上げている間に、もう行った」「行った？」

彼は、男達が眠っていた辺りに視線をやる。さっきまで、確かにそこに何人が眠っていたはずなのに、いつの間にかみんな消えてい

た。

「ここでは、目が覚めたら行く場所があるんだ。各々、起きたらすぐに向かうことになっている。今日は、初日だから俺が付き添うが、明日からは一人で行けるようにしろよ」

ファーストはそう言うのと、付いて来いと命じるように顎をしゃくり、通路を早足で進んで行ってしまふ。彼は慌てて後を追った。居丈高な男に従わなければならないのは不本意だろうが、何も知らない新参者の立場では、さすがの彼もそうするしかないようだ。

彼は必死の形相で、前に行く男を追いかける。ファーストは歩幅が広がった。それなのに、後ろを気にする素振りも無い。彼は時折小走りになったが、速度を落とすよう懇願したりはしなかった。

彼らは最初、ブースの一番奥のコーナーにいた。巨大体感ゲーム機が設置されている、メタリックな色調の区画だ。そこから、フロアの中央を貫く太い通路を進み、一つしかない出口を目指している。ゲーム機は次第に小型化していき、極彩色が眩しい一人用筐体の波を抜けると、臓脂の床材の色だけが目立つ、何も置かれていないスペースに到達する。そこを七、八メートルほど歩いたところで、唐突にファーストが立ち止まった。衝突しそうになり、彼は慌てて空足を踏む。

「ここが出口兼入り口だ」

振り向きざま、ファーストが言った。苛立たしげな彼の尖った視線を真正面で受けても、まったく悪びれる様子がない。

「どこがだ」

小馬鹿にするように鼻を鳴らす彼。

揶揄する気持ちはよくわかる。確かに、ファーストが示した場所には、出入り口と思われるような扉も、向こうとこつちを遮る壁も、何も見当たらないからだ。そこは、フラットなフロアが、十五メートルほどありそうな幅広の通路に合流する、見通しのいい場所だった。少し先には、三分の一ほどの幅の通路が左右に交差しているのも見えるし、真っ直ぐ延びる中央通路の両脇に、お洒落なカフェ

を思わせる配置で、テーブルや椅子が並べられているのも見える。
「今通つて来たブースが、これからお前のねぐらになる。見てきた通り元ゲームセンターで、クラシッくな機械ばかりだが、結構遊べる」

彼の機嫌に頓着する気はないらしく、ファーストはすました顔で説明を始める。

「これからお前を、メシとフロのある場所に連れて行く。風呂は…まあ、シャワーしか使えないが、一日一回。飯は三回。俺達は指定された時間しかここから出られない。娯楽室と呼ばれる本や雑誌が置かれているブースもあるが、飯の後、余った時間しか入れないから、行く時は時計を確認しろ。トイレはブース内にあるから、それほど困ることはないだろう。で、ここから出る時は」

急に浴びせかけられた情報の洪水に目を白黒させる彼を見て、ファーストは愛嬌を感じさせる笑顔になる。そして、ずっと右手を上げ、大きく左右に振った。

「これでよし」

「何が？」

腑に落ちない顔で彼が聞く。

「これで解除完了だ」

「だから何が？」

「閉じられた世界を、開けた世界に変えた」

「何を言っている？ 別に閉じてなんかないじゃないか、ここは。ずっと先の方まで見えているんだから」

「このブースは、一つ一つ密室になっている。俺達はその中の一つに、いつも閉じ籠もっていなければならない」

「だからどこが」

要領を得ない説明に苛立ったのか、彼は口調を強める。ファーストが唇の片端を上げた。

「じゃあお前、俺の先を歩いてみる」

「お前、新入りだと思って、絶対俺をからかっているだろっ」

彼は腹立たしげに、突っ立ったままにいるファーストの横を、大股で通り過ぎる。

「うわっ！」

すぐに彼は叫び声を上げ、何かに弾かれたように後ろに飛び退った。右手をさすり、驚愕した顔で、今通ろうとした、ただの何も無い空間にしか見えないところを凝視する。

その様子を面白そうにファーストが眺めていた。

「何だよ、今の……」

動揺した様子で呟く。おそらく彼は、相当強い電気ショックを感じたはずだ。

「だから言っただろ、俺達は閉じ込められているんだって。ここは、其処ら中に電磁シールドが張り巡らされている。目に見えない電気柵さ。これは、決まった時間に、決まった場所でしか解除されないファーストは立っていた場所から少しずれ、足元を指差した。そこには、直径十センチほどの濃い臘脂の丸が染色されていた。床材より数段濃いくらいの色なので、よく目を凝らさないと見落としてしまいそうだ。

「この丸印があるところが、シールドの解除が可能な場所だ。ここで手を振って合図を送れ。そうすれば外に出られる。もちろん、指定時間内しか出してくれないがな」

「やっぱり誰かが俺達を見張っているんだな！ あのカメラでっ」
彼は怒りで顔を赤くして、天井を指差した。数多のレンズが彼らを見下ろしている。

「そうだよ。俺達がここで、物質的に不足無く暮らしていけるのは、あそこで俺達を監視している奴らのお陰だろ」

ファーストは淡々と言つてのける。

「なんであんなものに見張られてないとならないんだ！？」

「さあね。そんなこと、考えたこともないな。その内お前も慣れる」
それだけ言つて、ファーストは踵を返し、シールドを通り抜けてしまう。早足で数歩進んだ後、彼が付いて来ていないことに気付い

たらしく、立ち止まり、振り返る。

「さっさと出て来い。お前はまだ、このことを何も知らないだろう？　まだ話さなければならぬことがあるんだぞ」

せつつかれて、しばらく逡巡した後、彼は意を決してシールドを潜る。どうやら、怒りよりも好奇心が勝つたらしい。足取りは、さっきの電気ショックがよつぽど堪えたのか、薄氷の湖でも渡っているかのような爪先歩きだが。

怖々としたその動作を見て、ファーストが鼻先で笑った。馬鹿にされることに敏感な彼が、眉を吊り上げる。だが、すぐに回れ右をして歩き出してしまったファーストに、怒りをぶつけるタイミングを失くし、むくれた顔でその背中を追いかけていく。

二人は、真つ直ぐ延びる幅広の通路を進む。初めは遅れないように懸命にファーストを迫行していた彼だったが、次第に馬鹿らしくなってきたようで、段々歩速を緩めてしまう。すると今度は、両脇の壁に沿って並んでいる、家具やインテリアの類に興味を引かれ出したようで、首を忙しく左右に振り、きよろきよろと辺りを見回す。アンティーク調のテーブルや椅子が並んでいたり、カントリー調のチェストやソファがあったり、モダンでクールな家具が揃っていたり。イメージを同じくするものは大体近辺にまとめられ、各々僅かな間隔を置き、コーナーを形成している。洒落た家具類がずらりと陳列されているその様は、まるでインテリアショップの展示会場のようだった。

「なんでこんなに、いろんな家具が並んでいるんだ？」

失礼な態度への苛立ちより、好奇心の方が勝つたらしく、彼はファーストに駆け寄り、声を張り上げた。

「ここは、イメージごとに別々のブースになっている。電磁シールドで区切られていて、それぞれに俺達みたいなのが入っている」

ファーストは振り返りもせずに応えた。

「ここにいるのは、おまえ達だけじゃないのか？」

「当たり前だ。ここは、百人くらいは軽く収容できる施設だからな」

「この建物は何だ？ 随分広いな」

「さあね。噂によると、昔はショッピングモールだったらしいが。俺は、この階と、もう一階下のことしかわからない。それだけでも結構な広さだが……」

話の途中で、突然ファーストが立ち止まった。慌てて急停止した彼は、バランスを崩して躓きそうになる。

「これは重要なことだからはっきり言っておく。俺達は、この階とこの下、その二階しか、行き来が許されてない。その先に繋がる階段はあるが、絶対に行ってはならない。お前もこの一員になったわけだから、このルールは絶対に守れ」

振り返り、強い調子で言うだけ言うと、ファーストはまた元の方向に歩き出す。

彼は、一瞬呆気にとられた顔をした。それから、すぐに不快そうに顔を顰め、口の中で何か小さく呟いた後、再び歩き出した。多分、ファーストへの呪詛の言葉でも唱えていたのだろう。

前方正面に、びっしりと本が詰まった仰ぐほどの棚の列が見えてくると、ようやく長かった通路が終わりに近付いていることがわかる。

「ここが娯楽室だ」

ファーストは、本棚が並ぶ突き当りの区画を顎で示すと、右に曲がった。直角に交差している細い通路に入る。少しすると、すぐに階段が見えた。本当は、彼の居住ブースの前にも階段に繋がる通路はあるが、ファーストはその経路を選ばなかった。娯楽室を見せるつもりだったのだろう。

古びたコンクリートの折り返し階段は、上にも下にも続いていた。だがファーストは上には目もくれず、それが当たり前といった態度で下りていってしまう。気になるのか、彼はちらりと上りに視線を走らせたが、すぐに前の男の後を追った。

踊り場で一度反転し、もう一度同じ数の段を下りる。下階に辿り着いた彼の前に、ただっ広いフロアが現れた。向かい側の壁にまで

届きそうな、極めて長い木製の机と備え付けのベンチが、ずらりと平行に並んでいる。その連なりは壮観なほどで、彼は右側面の壁まで数メートルの位置に立っているが、左側は突き当たりが見えず、細波のように延々と長机が連続していた。ただ、規模の大きさはあっても、シンプルな長方形の机が並んでいるだけの設備は、上階の凝り様に比べると驚くほど簡素で、身窄らしい印象さえあった。

その、灰色の床に茶色の机が続く殺風景な眺めの中で、彩りと言えるのは、食事をしている青年達の姿だった。一人でいる者や、数人で固まっている者達が、ベンチのところどころに腰をかけている。結構な人数が座っているはずだが混雑して見えないのは、ここが広過ぎるからだろう。今日のこの時間、この場所に來たのは、彼らが最後だった。他の住人達は、すでに全員この階に集まっているはずだ。

その光景に目を見張る彼に、ファーストが教える。

「この階には、食堂と風呂場がある。ここは言わば楽屋だ。使える時間は決まっていて、起床したら、とにかくすぐにここに向かうこと。食事と風呂は、どっちが先でも構わない、時間内に済ませればな。とりあえず今日は、先にこつちだ」

二、三步進み、足元を指差す。

「印がある。ここには、数メートル置きに入り口がある」

丸印の上に立ち、手を振って合図を送る。シールドを越えるファーストの後を、すぐに彼も追う。

食堂に足を踏み入れた彼の耳に、皿にフォークが当たる音や青年達のさざめきが聞こえるようになったはずだ。空気のようなシールドだが、音をシャットアウトする機能も持っているのだ。

ファーストは机と机の間を通り、奥の壁際まで進んだ。壁に沿ってクリーム色のテーブルが直列に並び、その上にところどころ、食事の乗ったトレーが置いてある。今度は左に折れ、テーブルに対して直角状に連なる長机との間にできている通路を真っ直ぐ進む。彼はというと、ひたすらその後を追っていた。

十メートルほど歩いて、ようやくファーストは立ち止まった。くるりと振り向き、棒立ちになっている彼に向け、ぞんざいに言った。「これお前の」

テーブルの上の、白いトレーを指差している。彼は視線をそこに注いだ。

「お前の名前が付いている」

ファーストの言う通り、パンと玉子、スープなどが乗ったトレーの上に、彼の名前が書かれた紙が置いてあった。

「食事は必ず、自分の名前の入ったものを取れ。薬剤が配布されるが、一人一人の体質に配慮しているらしいから」

「薬!？」

彼が目を剥いた。

「何だ？ 薬を服用することなんて、珍しいことじゃないだろう？」
ファーストが鼻先で笑う。

「そりやそうだけど。でも、どんな薬を飲まされるかわからないと、不安だ」

「こんな狭い場所に、若い男が何人も押し込められているんだ。そりや、鎮静剤かなんかだろ」

ファーストは事も無げに言う。

「出されるものは残さず口にしておけ。ここで平和に暮らしていくためにはな」

そして、彼のトレーの側に置かれていた、別のトレーを持ち上げた。

「俺達のグループのトレーは、大体この辺りに置かれているから、覚えておけよ。それ持て」

促されて、彼も自分のトレーを両手で持つ。

近くに、コーヒーメーカー、ポット、水など、飲み物がまとめて置かれているコーナーがあり、ファーストはコーヒー、彼は水とオレンジジュースを取る。

周囲を見回していたファーストが、「行くぞ」と言って、長机の

方へ歩き出した。彼はコップの中味を跳ねさせながら、慌てて後を追っていく。

長机と長机の間の、細い通りに入ったファーストは、フロアの中ほどで立ち止まった。四人のグループが食事をしている。同室の者達だった。

彼らに「よおっ」と気安く声を掛け、トレーを机の上に置き、ファーストはベンチを跨ぐ。一人分の空きを置いて、集団の隣に腰を下ろした。先に食事を始めていた男達が、口々に気軽な挨拶を返す。セカンドにフォース、それからセブンスとエイツが、それぞれ向かい合わせになつて座っていた。

彼は少し離れたところで、その様子を戸惑い顔で見つめていた。昨晚、全員と顔を合わせているのだが、記憶がはっきりしていないのだろう。

「ここに座れ」

ぼんやりと突っ立っている彼に、ファーストが指示を出した。自分と四人との間に作った席に、座れと言うのだ。

いささか躊躇した後で、彼は言われた通りの場所に腰を落ち着けた。

「おはよう」

彼の斜め前に座っているセブンスが、人懐っこい笑顔で挨拶した。丸い瞳が小鹿のように愛らしい。まだ少年と呼ぶ方が相応しい年頃だ。

彼ははにかんだ様子で、小声で挨拶を返す。セブンスの隣のエイツと、エイツの前に座っているフォースも、それに応じて挨拶した。彼の隣に座るセカンドだけは、無関心な態度で、前を向いたままコーヒーを啜っている。

「こいつらは、ねぐらが一緒の仲間だ。名前は覚えているか？ 昨晚名乗ったが」

ファーストが聞く。

「あ、うーん……何となく……」

彼は困り顔で言葉を濁す。

「昨日は、まだよく目が覚めていない状態だったから。もう一度名前言おうか？」

助け舟を出したのは、がっしりとした体型に似合わない、人の良い笑顔を浮かべるフォースだ。

「悪いが、そうしてやってくれ」

彼ではなくフォースが答え、四人は順に二度目の自己紹介をした。

セブンスと同じ年頃で、凛々しい顔立ちの少年がエイツだ。並外れて端正な顔立ちをしているが、神経質な印象を残すのがセカンド。この男は、さつきから一度も彼を見ようとしなかった。

「俺、もう食い終わった。風呂行つていい？」

エイツが暢気な口調で言った。

「ああいいぞ。どうせこいつとは、これからうんざりするほど顔を合わさなきゃならないんだ」

彼を指差しながらフォースが答える。

「うんざりなんて言い方は……」

セブンスが困り顔でたしなめた。この少年は若いのに、気を回すタイプのようだ。

「いいんだよ。新入りに気を遣ったってしょうがない」

フォースはぞんざいに言い、パンに齧りついていた彼の頭を、横から軽く小突く。驚いた彼は目を怒らせ、自分を叩いた相手を睨み付けた。慌ててセブンスが取り成す。

「ごめんね、怒らないで。遠慮がないから焦る時もあるけど、頼りになるいい人なんだよ、その人」

「ああ、それは本当だ」

端からフォースも同意する。

「よせ。お前らに褒められると、何か面倒な事でも仕出かしたのかと思う」

顔を顰めるフォースト。

「だって本当だから」

「うん、本当だからな」

セブンスとフォースは顔を見合わせて強調する。どうやらわざと大袈裟に褒めて、照れる相手を冷やかしているようだ。

「じゃ、俺行く」

マイペースな性格らしく、エイツが唐突に立ち上がった。

「ちよつと待つて、僕も行く」

それを聞いて、ファーストをからかっていたセブンスが、慌てて食べ物を口に詰め込んだ。エイツは慣れっこといった態度で、その場に突っ立ったまま待っている。

「じゃ、僕ももう行く」

セカンドが静やかな物腰で立ち上がる。

「飯、あんまり残すな」

セカンドのトレーの上には、まだかなり食べ物が残っていた。それを目敏く見咎めて、ファーストが釘を刺す。名画の中の美青年にも劣らない完璧な笑顔を浮かべ、答えるセカンド。

「腹減つてないんだ。でも、薬はちゃんと飲んだよ」

「しょうがない奴だ」

ファーストが諦め顔で引き下がった。会話する二人の間に挟まっている彼は、居心地悪そうな顔をしている。

「ありがとう」

美しいが、堅い印象だったセカンドの笑顔が、花のように綻ぶ。

「それじゃ俺も」

フォースも腰を上げる。ベンチを跨ぎ、セカンドと肩を並べ、どこかへ歩き去って行く。

必死にパンの残りを口に押し込んでいたセブンスも、ようやく食べ終わったらしい。ファースト達に一言声をかけ、待っていたエイツと一緒に、先に行った二人を追って行った。

ファーストと二人きりでその場に残されてしまった彼は、気詰まりな様子で、ひたすら無言で食べ続けている。

「今の奴らの他に、あと四人同室の仲間がいる。そいつらは閉じてるんで、基本的に一人で行動している。そいつらとも、どうせこれから散々顔を合わすことになるから、わざわざ紹介したりはしないが、この辺で一人で食っているのがそうだ」

そう教えられ、彼は顔を上げて周囲を見回す。確かに近くに何人か、一人で食事をしている者達がいた。

彼はすぐに視線を皿の上に戻し、また食べることに集中する。ところがしばらくして、ふと思い付いたようにぼつりと一言洩らした。「俺の隣にいた奴、一度も俺の方を見なかった……」

「あいつは人見知りするから。だが、慣れてくれば大丈夫だ。優しい奴だし」

「本当に優しい性格なら、新入りに何か一言声をかけたっていいだろう？　俺の斜め前にいた奴みたいに。あいつは、俺がここに存在していないと思っっているような、完全に無視した態度だったぞ」

「仲間の名前くらい、早く覚えろよ」

呆れ顔で咎めたファーストは、すぐに薄笑いを浮かべ、彼を揶揄する。

「お前、案外気の小さい奴だな。自分に注目してくれないと嫌われているような気がして、不安なわけだ」

「何だと!？」

彼は隣の男を睨む。

「そう簡単に怒るなよ」

ファーストはにやにやしている。どうやら彼は気位が高い分、からかうには絶好の相手のようだ。

面白がられていることに気付いたのか、彼は悔しそうに唇を強く引き結び、顔を背けた。少しの間顰め面で虚空を睨んでいたが、心細くなったらしく、かすれた声で問う。

「ここは、一体何だ……?」

「何って?」

「何で、若い奴らがここに集められているんだ?　どうやら、誰か

に監視されているみたいだし……。何だって俺は、こんなところにいるんだ……？」

「さあね。何でだと思う？」

ファーストが横から彼の顔を覗き込む。不愉快そうに彼が顔を逸らすと、ファーストは真顔になり、忠告した。

「その答えは誰にもわからない。だから考えるな。そんな、腹の足しにならないことより、生きていくために、ここの暮らしに慣れることを考える」

パンの残りを口に放り込み、ファーストはくぐもった声で続ける。
「お前は、ここ以外のどこかに行けるわけじゃない。そんな希望は無いんだ。だから今は、ここで上手くやっていくことだけに集中しろ。変に考えるとおかしくなってくるぞ。お前がそうやってしまっても、誰もお前を救い出してはくれないからな」

「ずっとここにいろ……」

彼の眉間に深い苦悶の皺が生じる。

「慣れれば、ここだってそう悪い場所じゃない。まず、ここでは飯に苦労しなくていい。それが生きていく上で、一番重要なことだろう？ それに、本も読めるし、ゲームで遊ぶこともできる。それから……」

ファーストの顔に、言い知れぬ陰が浮かぶ。

「時々、イベントもある」

「え？」

意味を解せなかったのだろう、彼は詳しい説明を期待し、ファーストに顔を向ける。だが、ファーストは話を切り上げ、彼をせつついた。

「ほら、いい加減早く食べ。朝の自由時間は二時間しか無いんだ。風呂の後で、さっき通ってきた娯楽室の中も案内しなきゃならないんだからな」

「もついい……」

急かされることに慣れていない彼は、食欲を無くしてしまったの

か、手に持っていたパンを皿に戻した。

「まだ残っているようだ」

「そんなに腹は減ってない。それに、全部食べなくなっただけいいんだろ？ 残してた奴、他にもいただろ」

「食べ切るのが望ましいがな」

ファーストは目を細め、考えあぐねている様子だ。セカンドに許した分、強く言い切れないのだろう。

「わかった。初日ということで大目に見てやる。だが、次からは全部残さず食べる。それが結局、お前のためだからな。ここの食事は、各人の健康状態を配慮して用意しているらしいから。それから、薬は残していいわけじゃないからな。腹が膨れていても、錠剤くらい流し込めるだろ」

小皿に乗っている錠剤を指差され、強硬な語気に押されたのか、彼は素直に薬を指先で摘み上げ、水で流し込んだ。

それを見届けてから、ファーストは自分の食事を再開した。二、三分で残りをすべて食べ終えてしまう。立ち上がりながら、待つている彼に告げた。

「じゃ、次」

長机の上にトレーを置いたまま、さっさと歩き出したファーストに習い、彼も腰を上げる。

机の間を抜け、左に折れて、朝食が置かれていたテーブルに沿って進む。食堂は、延々と先まで続いているように見えている。彼らの数メートル前にも、同じ方向へ進んでいる数人の青年達がいた。狐につままれたような顔をして、彼が前方を凝視する。先を歩いていた青年達の姿が、急に跡形も無く消えてしまうことに気付いたのだろう。

「おい、前の奴ら……！」

彼は怯えた様子で右手を伸ばし、前に行くファーストの腕を掴んだ。

「別に消えているわけじゃない。お前もすぐわかる」

ファーストは歩調を緩めず、ちらつと振り向いて言った。素っ気ない声音に怯んだのか、彼は掴んだ手を離す。

ファーストが言ったことは本当だった。無言で歩き続けていた彼が、突然大声を上げた。立ち止まり、驚愕した顔で目を見張り、きよきよと辺りを見回している。

「ここが風呂だ。ここと食堂の間には、鏡と同じ作用をするシールドが張つてある。やたら食堂が広く見えただろうが、むしろこっちの方がフロア面積は広い」

ファーストが説明した。終わりが見えなかった長机の波が消え、唐突に違う光景が現れたのだ。

そこは、巨大な虫の巣の中に迷い込んでしまったのかと、慄いてしまいそうな光景だった。人が両手を広げたほどの幅の、長方形の箱のような白い小部屋が、ぎっしりと埋め尽くすようにフロアを占領していた。それは、シャワー設備とトイレ、そして脱衣場がセツトになった、コンパクトなユニットルームの連なりだった。

彼は今、ファーストが風呂と呼んでいた場所の一角に立っていた。壁沿いに通路が延び、それに対して並列状に、一群ごとに人が移動できるほどの間隔を空け、横に二室、縦に十室ずつ小部屋が並んでいる。

「こつちだ」

ファーストは彼に声を掛け、通路を先に進んで行く。三番目の角を曲がり、端から五つ目、右側の部屋の前で止まった。

「わかりやすいだろ。五十五番目のブースだ」

振り返り、後を追っていた彼に告げる。ファーストが指差した小部屋の前の扉には、《55》と番号が書かれた札が張つてあった。

「これがお前のシャワールームだ。お前がここにいる間、変更はまず無いから、忘れるな。中に入ると、手前の脱衣場のところに、今日の着替えがハンガーに掛かっているから、シャワーを浴びたらそれに着替える。今着ている服は、中に置いたままでいい。着方の指示なんか書かれたメモがある場合もあるから、棚の上も見ておけ

よ」

彼は素早く首を縦に振った。どうやら早く中に入りたい様子だ。

「何か聞きたいことはあるか？」

今度は首を横に振る。

「じゃ、終わって、まだ俺がここに来ていなかったら、この辺りに立って待っている。この後は娯楽室に行く。あまり長時間入っているなよ」

ファーストはそう言うのと踵を返し、来た通路を戻って行く。

彼はほっとしたような顔をして扉を開ける。狭い部屋だが、手前には板張りの脱衣場があり、言われた通り、右壁際のハンガーラックに服が掛かっていた。左側には全身が映る鏡と、タオルや小物が置かれた作り付けの棚もある。奥は、ガラス張りのシャワーブースになっていた。小さなバスタブと便器が見える。

彼は焦った様子でシャワーブースの扉を開け、白い便器に向かった。ズボンのファスナーを下ろし、用を足す。

どうやら、さっきから尿意を我慢していたようだ。就寝中は目覚めないよう、薬で水分調節されているはずだが、まだ上手く作用しなかったのだろう。

それから彼はその場で一気に服を脱ぎ、全裸になった。脱衣所の床の上にそれを放り投げ、白いバスタブの中に立つ。

壁に取り付けられたコックを捻ると、その上の蓮の実のようなシャワーヘッドから、勢いよく湯が流れ出た。白く肌理細かい肌の上を、水滴が滑っていく。

惜しみなく注がれる水流を頭から浴び、彼は大きな溜息を吐いた。肩を落とすその姿から、今の状況への戸惑いと不安を感じ取れる。

彼は上を向き、顔を洗う。ところが、何か気になるものに気付いたらしく、慌てた様子でシャワーを止めてしまう。

もう一度、彼は天井を見上げた。次第にその顔が怒りに染まり、険しくなっていく。

いきなりバスタブから出て、びしょ濡れのまま脱衣室に戻る。盛

大に床を濡らしながら、乱暴に棚からバスタオルを引っ手繰り、腰に巻いた。そして、荒々しい動作でユニットルームを飛び出していた。

通路に立った彼は、信じられないものに遭遇した顔で、しばらく茫然としていた。しかし、すぐに癩癩が湧き起こったらしく、罵りの言葉と共にファーストの名を大声で喚き出した。

シャワールームの中にいた者達が、何事が起こったのかと、それぞれのブースから出て、半裸で怒鳴る彼の姿を遠巻きにした。それでも我を忘れている彼は、ひたすら叫び続けている。

ようやく人垣を掻き分け、彼が待ち望んだ男が現れた。相当急いで駆け付けた状態で、前髪が濡れたまま額に張り付き、辛うじて下は穿いていたが、上半身は裸だった。

「何をしている？」

怒号を撒き散らすクラッカーボールのような彼に冷笑を向け、ファーストが聞いた。待望の男が現れたことで、彼はやっと喚くのを止める。そして、炯々と燃える目で相手を見据え、怒りに震える声で注進した。

「シャワーブースにカメラがあった」

「あ、そう」

ファーストの答えはあっさりしたものだった。どうやら深刻な事態ではないと判断したらしく、周囲を見渡して声を張り上げる。

「新人が騒いでいるだけだ、大したことじゃない。皆、支度の続きをしてくれ、自由時間が無くなるぞ」

取り囲んでいた野次馬達はそれを聞き、素直に各々のシャワールームへ戻って行く。

「お前、知っていたのか!？」

そんな風に簡単に受け流されるとは思っていなかったのだろう、彼は取り乱す。

「そりゃ知ってたさ。ここじゃ、それが当たり前だから」

「当たり前だって!？」

彼は、眼球が零れ落ちてしまいそうなほどに目を剥いた。ファーストが皮肉めかす。

「いいか。ここで暮らす奴らには、プライベートなんて上等なものは欠片も無いんだ。カメラはどこにでもあるし、風呂だろうがトイレだろうが、俺達是一日中見張られている。だが、そんなこと気にする必要はない。カメラの向こう側の奴らのことを、俺達は一生知ることができないんだから」

「何で！？ 何で知ることができないんだ！？」

「さあね」

ファーストは肩を竦める。

「逆に聞くが、何で知る必要があるんだ？ 俺達は、この繭のような世界で、虫のように生きている。俺達を飼っている奴らが誰で、何のためにこんなことをしているのかなんて、飼われる虫けらには意味のないことだろう？ 必要な時は、あいつらからこっちに接触してくるさ、シャワールームにメモを置いてな」

「信じられない！！ お前ら、何とも思わないのか！？ こんな状態でよく無神経に暮らせるな！？ こんなのは人間の暮らしじゃない！ 家畜か何かじゃないか！！」

これ以上ないほどの激しい憤りで興奮し、彼の顔は真っ赤に染まっている。ファーストが冷酷な眼差しを向けた。

「俺達より家畜の方が、プライベートは保障されているかもな。だが、ここにはこのメリットがあるんだ。だから、右も左もわからない新入りの分際で、あんまり不平を撒き散らすな。お前だって、ここで楽しくやっていきたいだろう？ 俺には何を言ってもいいが、ここの流儀がわかるまでは大人しくしておけ。ここには、お前に好意的な奴らばかりがいるわけじゃないからな」

「いいから俺をここから出せよ！ こんなところじゃ暮らせない！ 出せ！！ 出せよ！！」

嘲笑を口元に浮かべ、ファーストが宣告する。

「無理だ。お前はここから出ることはできない。今この場所にいる

ってことは、そういうことだ」

僅かな慰めもない冷厳な事実^{じじつ}に射抜かれ、彼の瞳は絶望に塗り潰されて、光を失う。そして、雷に引き裂かれた樹木のように崩れ落ちていった。

「おい!？」

ファーストが彼を抱き止める。その胸に顔を埋めたまま、彼は動かなかった。

赤いキャットスーツの女

「それじゃあんたは、俺達が出ていた放送を見ていたって言うのか」
ゲーム機の間を颯爽と歩いて行く女の背中を追い掛けながら、コータは驚きを露わにして質問した。

「そう。星の数ほどある有料放送の一つで、お洒落な服を着た男子達が暇そうにしているのを見るだけの番組。私はタダ見たんだけど」
切子は歩きながら首を捻り、顔を向ける。

「いつもは、ただ男子達がだらだらしているだけだから、基本的に環境映像みたいな番組なんだけど。でも、時々イベントが起こる。ああいう」

前方に向き直し、切子は床を指差した。

コータは彼女の肩越しに、そこに誰かの死体が転がっているのを見た。首と体が無惨に切り離されていて、途端に腥い臭いが鼻につく。だが、血痕は臍脂の床材に染み込んでしまったのか、目立たなくなっていた。

「この子、私が気に入っていた子だ」

通路を塞ぐ死体を跨ぎながら、切子が残念そうな声を上げた。濁った大きな瞳を天井に向けて見開いている首が、道端に捨てられた鞠のように所在無げに転がっている。

吐き気を押さえ切れず、コータは慌てて手で口を押さえた。そこで動かぬものになっているのは、親しくしていた数人の内の一人で、彼らの死体を見るのはこれで二度目だった。

惨たらしいその姿を跨いで行くことがためらわれ、足が止まる。だがすぐ、切子に「早く！」と急かされてしまう。

ぎゅっと目を瞑り、友達の体を飛び越える。着地した時、足に湿った血の感触が伝わった気がして、背中が凍った。

もう一度死体を見るのは恐ろしかったが、このまま去るのは後ろめたく、別れを告げるつもりでちらりと振り返る。しんがりを務め

ているリュウが、僅かな逡巡も見せずに死体を一跨ぎするのを目にし、コータは遣り切れない気持ちになった。

「イベントって何だ？」

網膜に残ってしまったっている惨たらしい光景をどうにか追い遣ろうと、コータは先を行く切子にさっきの続きを尋ねる。

「知らないの!？」

切子が声を上げ、また顔を向けてきた。コータはきょとんとし、聞き返す。

「何を？」

「この子って閉塞しているの？ その割にはよく喋るけど」

コータの背後にいるリュウに向かい、切子が声を張り上げる。

「そいつは新入りなんだ」

「それは知ってるよ、見ていたから。だけどこの新入りは、こんなことも知らずに入って来るもんなの？」

「いろいろだな」

リュウが淡々と答える。

「何の話だよ!？」

意味のわからない話を頭越しでされ、苛立ったコータは声を荒げた。切子の視線が戻る。

「あんだ達の番組は、正式な許可を得ていない地下放送だった。今はほとんどそんなのばかりだけど。大っぴらにしてないけど、スポンサーも付いているしね。過激なことができるから、正規の番組より人気があつて。その中でもあんだ達が出ているのは、結構な視聴率を稼いでいるらしいよ。だけど、ただ格好いい男達がきれいな服を着て映っているだけの放送が、そんなに見られているのは不思議でしょ？ 普通は退屈だよな」

「だったら何だよ」

「だからさ、時々イベントを起こすわけ。残酷で刺激的な血のイベントを。それがあんだ達の番組の売り。それがいつ起きるかは知らせず、視聴者が退屈な映像を想像と期待で膨らませて、見ずにはい

られなくなるように」

「じゃあ、今日のことは……」

「視聴者が待ちに待ったイベントが起きたってこと。殺戮者はいつもとちよつと毛色が違っていたけど」

真実を知り、コータは頭をハンマーで殴られたように感じた。

「ふざけるな！」

思わず怒声が口をついて出た。激昂のせいで体が震える。

「じゃあ俺達は、殺されるために、毎日のうのうとここで過ごしていたっていいのか!？」

「そういうこと。本当に知らなかったんだ？ この新入り」

切子の視線がリュウに移る。

「コータだっ」

怒り心頭に発していたが、それでも新入りと呼ばれるのが気に障り、コータは思わず名乗っていた。

「へえ、コータっていうんだ。あんたらの名前、初めて知った。そっちは？」

「リュウ」

名前を告げてから、リュウは問い返した。

「切子、だっけ？ それで、あんたは何でここにいる？ あんたもこの番組の視聴者なんだよな？」

決まり悪げに眉を顰め、切子は前方に向き直った。歩調を緩めることなく答える。

「私は、何にも起きない退屈な映像の方を気に入っていた。いい男を見ると気持ちちが和むからね」

「それで？」

「だからさ。人がせつかく気分良くしているところを、いちいち血腥い映像で水を差してくれるもんだから、いい加減腹が立ってきたわけ」

「それだけ？」

「そっだよ？ ここに収録スタジオがあることは知っていたからね。」

って言うか、やばいことをしていると、ほとんどのこの街にあるものだし。侵入するのは、さして難しいことじゃないから、あんた達みたいなのが集められている場所は」

「じゃあ、あんたは本当に只の視聴者で、放送中の番組に乱入してきただけなのか？」

「そういうこと」

「それって犯罪じゃないか？」

「このスタジオから私が訴えられることは、無いだろうけどね」

顔を向け、切子がやりと笑う。混乱しながら二人の会話を聞いていたコータは、ふと近くに感じていた気配が消えたことが気になり、振り返った。リュウが立ち止まっていた。つられて自分も足を止める。

「あんたがまったくの部外者なら、俺と一緒にいく理由は無いな」「リュウ」

コータはリュウの言葉に戸惑い、思わず名を呼んでいた。その横を、切子が早足で通り過ぎる。リュウの前で仁王立ちになり、彼女は一息に捲し立てた。

「それはそう。今回のイベントの主演に選ばれたあんた達が、甘んじてその役目を引き受けるつもりなら、私は何も言うことはない。実際助けるって言ったって、あんた達はここから出た途端、何もかも自分でやっていけなくなるんだし。ねぐらを探さなきゃならないし、食べ物だって自分で調達しないとならない。今みたいにきれいな格好なんて、絶対できなくなるね。ここから連れ出すことが、本当にあんたらを助けることになるのか、私もよくわからない。だから、あんたがこのままここに残るって言うなら、それは止めない。好きにすればいいよ」

「俺は嫌だ！ あんたと行く、こんなところで死にたくない！」

切子の背後で話を聞いていたコータは、我知らず叫んでいた。ここがどういう場所か事実を知ってしまった後で、ここに残ることはできない。行く先に何があるのかわからなくても、今、目前に迫る

恐怖から直ちに逃げ出したかった。

肩を捻って振り向いた切子が、にっと歯を剥き出して笑った。

「了解、そっちは一緒に来るのね。で、あんたはここに残るわけ？」
問い詰めてくる切子に、不機嫌そうに顔を顰め、リュウが答える。

「そいつが行くなら俺も行く」

「何だお前？ 別に付いて来なくていいんだぞ」

これまで味方になってくれることなんて一度も無かった、特に親しくもない男の態度に不審を感じ、コータは言った。

「俺は一応、ここのブースのリーダーだからな」

「何がリーダーだよ。今までお前、そんな責任感溢れるようなこと、俺に一度だって言ったことなかっただろう。なんだかんだ言って、結局お前もここに残るのが嫌なだけなんだろう？」

「そうかもな」

嫌味をたっぷり含ませたコータの言葉を、特に気にする素振りも無くリュウが受け流す。珍しく一方的に遣り込めるチャンスを得たコータは、もつと責めてやりたいという誘惑に駆られていた。だが、これからのことを考え、ぐっと堪える。顔見知りのリュウと一緒に来てくれるなら、その方が都合いいのだ。切子に付いて行くことは決めていても、先行きに不安が無いわけではない。例え不仲な相手であっても、知った顔と一緒にいてくれるのは心強かった。もちろん口が裂けても、そんな本心をコータが告げることは無いが、ここで余計なことを言って、リュウの気持ちが変わってしまうのが怖かった。

「じゃ、決まったところでさっさと行くよ。今後は戻りたいと願っても無理だから、そのつもりで覚悟して。それから助けるって言っても、私の体は一つしか無いんで、複数の相手とやってる時は庇えないかもしれない。だからあんたらも、自分の身を守ることを考え」といて」

「それは心配するな。俺は、元は兵士仕様だ」と、リュウ。

「兵士！？ 何でそんなのがこんなところにいるの？」

「不良品だからさ」

切子の驚きに、リュウがさりと返答する。

「ふうん……ま、今はそんなのどうでもいいことだけど。でも、あんたが使えるなら、私も心置きなく暴れられる」

切子是不敵な笑みを浮かべ、再び早足で歩き出した。追い越されたコータは慌てて後を追う。少し不安になり、背後を顧みてみる。

リュウが付いて来ていることを確認し、歩くスピードを速めた。

「ああ、そういえばさあ。最近、一人いなくなったでしょう？ あれ何で？」

しばらく黙っていた切子が、唐突に聞いてきた。

「え？ いつ？」

「一ヶ月くらい前」

「一ヶ月前？ 俺達のブースで？」

「そう」

その頃なら、コータはすでにここにいたはずだった。だが、そんな記憶はない。

「何の話だ？」

リュウが尖った口振りで話に割り込んできた。

「まあいいけど」

切子はそれだけ言って口を噤む。腑には落ちなかったが、命が危険にさらされている時に、そう重要とも思えないことにコータの気が取られることはなかった。

三人は、ブース出口に近付きつつあった。あと数メートルほど歩けば、ゲーム機の波を抜け、何も置かれていない見通しのいいフロアに辿り着く。そうすれば、惨劇が繰り広げられたこの場所から脱出できるはずだ。コータは、恐ろしい状況に巻き込まれてから初めて少しだけ安堵した。

「隠れて」

それなのに、微かに灯った希望の光を掻き消すかのように、切子の鋭い声が響く。

乱暴に腕を引っ張られて、コートはリュウと共に近くのゲーム機の陰に身を隠した。うずくまるコートの背後に覆いかぶさるように立ったリュウが、身を乗り出して外の様子を窺う。

しゅるるる……と、風笛のような音が聞こえた。

何が起こきようとしているのか知りたくて、コートは恐る恐る物陰から顔を出す。切子は通路の真ん中に突っ立ったままだ。すぐにも留まらぬほどの速さで腰の鞘から刀を引き抜いたかと思うと、彼女はそれを左から右に薙いだ。

キンツと、甲高い音が響き、次に、ガンツと、硬質なものがぶつかり合う音がした。何かがゲーム機に当たったのだと思い、コートは辺りを見回す。切子の足下に、小型の投げ斧が落ちていた。右手に刀を持ったまま屈み、左手でそれを拾い上げて、彼女は何故かにやりと笑った。

「行くよ」

隠れている二人に声を掛け、再び出口の方向に歩き出す。

「おい！ 大丈夫なのか！？」

突然斧が投げられたということは、どこかに敵がいるはずなのだ。不用意に身を晒して、狙い撃ちされないと限らない。しかし、振り返りもせず先に進んで行く切子に、コートはゲーム機の陰から出て行くしかなかった。リュウも何も言わず、後から付いて来る。

もっ少しで通路が終わり、出口のあるフロアに出られるというところだった。不意に、行く手を塞ぐ人影が現れた。

切子が足を止めるのと同時に、後に続いていたコート達も止る。

切子の肩越しに、一人の女が立っているのが見えた。鉾や鎖が縫い付けられた赤いキャットスーツを着た、長身の女だった。ぬめぬめと光る素材が、見事な曲線を描く体にぴったりと張り付き、なまめかしい。そのボンテージ風のコスチュームは、友人達の首を切り落した獣面の女達を連想させ、コートの身を竦ませた。だが、その女がさっきの殺戮者達とはまったく違う存在であることは、すぐに推断できた。

女の顔には、特異なところが何も無かったのだ。外見は、どこからどう見ても、単なる普通の人間でしかない。ただ、相当な美人だということ以外は。つんと上を向いた鼻やぷっくりとした唇、長く濃い睫毛に縁取られたアーモンド形の目。そして、その色素の薄い瞳は、誘惑してくるかのごとく蠱惑的に潤んでいる。左足に体重を乗せ、突き出した右腰に片手を置き、豊満な胸を反らして挑発するようなポーズで立っている目の前の女に、コートはできれば、こんな切羽詰った状況下でなく、何事も無い平穏な時に会いたかったと思った。

「やっぱりあんたか」

そう呟き、切子は間髪入れず、手にしていた斧を女に向かって投げ付けた。

思わず、コートは息を呑む。

しかし、キャットスーツの女は慌てる様子も無く、空を切り、自分の顔目掛けて飛んできた斧の柄を、刃が額を割る寸前で掴んだ。すぐに腰のホルダーに斧を収め、鮮やかに微笑む。

「ここであなたに会うとは思わなかったわ、切子」

「その台詞はこっちが言うことだ。さっきの猫女達は、あんたらが絡んでいるわけだ？」

「そう、あの子達はうちの新人。コミュニティの新しい資金源にするために、パパが開発した量産型よ。今日が初めての御披露目だったのに、あなたのせいで台無しになっちゃったわね」

左手でウェーブのかかった長い髪を掻き上げながら、女は眉を顰めた。

「そりゃ悪かった。で、新人の敵打ちにあんたが乗り出すわけ？」

切子の当てこすりに、女は小首を傾げて肩を竦める。優雅な猫に似た動作だ。

「冗談でしょ？ こんなことであなたとやるのは割に合わないわ。コミュニティにとってこれは、ちょっとしたアルバイトみたいなものなの」

「あ、そう。じゃ、そこ通してもらっよ」
切子が前に出る。

「いいわよ。でもうちも契約上、このまま済ますわけにはいかない
みたいなの。それから、今のこの状況、平常通り放送されているわ
よ。突発的な事件のお陰で、後からも売れる映像になるかもしれない
って、逆に喜ばれているみたい」

不快そうに女を睨み、切子が足を止める。

「放送事故になってないの!？」

「なってないわよ」

女はにつこりと微笑む。

「元テロリストの切子が美男を守って戦うなんて、なかなか感動的
なドラマじゃない？」

「テロリスト!？」

その呼称に驚き、コータは声を上げた。女が、興味津々といった
視線を向けてくる。

「その子、あなたが札付きだってこと知らなかったのね。この子達、
不良品なんだものね」

「不良品……?」

コータは啞然とした。そんな言葉が自分達に当て嵌まるなど、一
度だって考えたことは無かった。

「不良品とはご挨拶だな。あんたらしいな外れ者が生きていける
のは、俺達みたいなのがいて、食い扶持を稼ぐことができるからだ
ろう?」

リュウが皮肉めいた口調で言い返した。

「あら、閉塞しているのばかりだって聞いていたけど、それだけ
じゃないのね。気を悪くさせたならごめんなさい、配慮が足りなか
ったわ。自分にはどうでもいいことだからって、投げ槍じゃだめね
うちのパパが本気で取り組んでいることなんだし」

臆すること無く女は笑顔を向ける。その厚顔な態度に、呆氣に取
られていたコータも我に返った。途端に見下された怒りが湧き上が

り、さつき彼女の美貌に見蕩れてしまったことが腹立たしくなった。
「何だよこの女は！？ 切子、お前の知り合いなのか！？」

振り返り、声を荒らげるコータを見て、切子が煩わしげに答えた。
「この女はナツ。《ラブ・ファクトリー》っていう、狂ったカルトの幹部」

「カルト？」

「犬丸っていうマッドサイエンティストを教祖と崇め、そいつの娘と名乗る女達が集う、最高に醜悪な宗教団体だよ」

切子が吐き捨てるような口調で説明する。

「ひどい言われようね。でも、一つ誤解を解いておくと、私は今、幹部ってほどの位置にはいないわ」

「え？ 何で？」

女に視線を戻し、意外そうに切子が聞く。

「いろいろあったの。うちのパパって、変なものを作りたがるじゃない？ 今日の新人みたいに」

ナツという名の女は、寂しげな笑みを頬に浮かべた。

「あの女達は悪趣味だ」

露骨な嫌悪感を示して、切子が言い捨てる。

「そう……かもね？ あなたは、いつもパパのやることを否定するのね。だからパパは、あなたを目の敵にするのよ」

「気持ち悪いことばかりしているんだから、仕方ない」

「あなたに気持ち悪いって言われる度、軽くダメージを受けるのよね、私……」

ナツが苦笑する。

「それなら、そろそろ見切りをつけたらどうよ？ あの変態科学者がパパとか言われて奉り上げられているのは見苦しいから、信者が一人でも減るんなら喜ばしい」

「いい加減にしろ！ こんなところでグダグダする時間は無いはずだろ！？」

悪友同士が交わすような気安い会話を繰り返す女達に、コータ

の堪忍袋は限界に達し、思わず怒声を上げていた。死ぬか生きるかの危機的状況にあるはずなのに、緊張感のない無駄口をいつまでも聞かされるのは我慢ならなかった。

「プリティ系を怒らせちゃったわ」

ナツが唇を尖らせる。

「お前、話を聞いたら、俺達を襲った猫みたいな女達の仲間だつてことだよな！？」よく俺達の前で、そんなのうのうとしていられるな！？ 何であんなことをした！？ 一体何のために！？」

「それは、私に聞くことじゃないわ。私達はイベントに花を添えるために呼ばれた、特別ゲストだもの」

悪びれることなく微笑むナツ。

「じゃあ誰に聞けばいいっていうんだ？」

「さあ？ そっちのワイルド系に聞いてみたら？ ここ、長いんでしょ？」

振り返り、ナツが視線で示した先をコータは見る。指名された男の顔に、強張った蠟人形のような笑い顔が張り付いていた。ずっと寝食を共にしてきたのに、初めて目の当たりにする彼の異様な表情に、コータは息を詰める。

「じゃ、でしゃばるのはこの辺にしておくわ。ちゃんと伝えたわよ、この状況が放送されているってこと」

「私にギャラは払われるの？ でないと割に合わないけど」

声高にクレームをつける切子に、ナツが呆れ顔を向ける。

「わかつて言っているんでしょうけど、本当はこんなところにしゃしゃり出てきた時点で、そんなことを言う権利、あなたには無いのだからね。こうして私が来たのは、顔馴染みへの一応の仁義と受け取って欲しいわ。パパを無理に説得して来たのよ」

「どうだか。あんたがあいつに逆らえるとは思えない」

断定する切子にナツは小さく微笑んだだけで、否定も肯定もしなかった。

「それじゃ私は、あなた達がこの後どうなるか、視聴者気分で楽し

ませてもらうことにするわ。パパは本気よ」

言うやいなや、ナツは横に飛び退いた。彼女が遮っていた視界が開け、彼方が見渡せるようになる。ブース出口の辺りよりもっと先、中央通路の方から、わさわさと蠢く黒いものが近付いて来るのが見えた。

切子が駆け出す。ゲーム機の波を抜け出し、見通しのいいフロアに立った。コータとリュウも続く。

コータの目の端に、一番手前のゲーム機に寄りかかっているナツの姿が入った。しかし、意識はすぐに、もうかなり近くにまで来ている黒いものに奪われてしまう。それは、コータ達を襲ったあの恐ろしい殺戮者と寸分違わぬ姿をした、化け猫のような女の一団だった。中央通路の端から端までを埋め尽くし、わざと隙間が出来ないように並んでいるのか、虫の卵のようにびっしりと密集して群を成している。

女達は、ブース出口の手前で行進を止めた。コータは凍り付く。悪鬼のような女達が、獲物を待ち構えるかのごとく、行く手の通路を埋め尽くしているのだ。前面しか見えていないので、後方にどれほどの人数が連なっているのかはわからなかった。だが、ここからでも感じられる圧力から、相当な数が集まっているのだと推測できる。

コータは、目前に横たわる恐怖の前で呆然と立ち尽くす。希望は打ち砕かれてしまったのだと、そう思った。

挿話 三

【五日目】

「だから、それじゃだめだつて」

「なんだよ、うるさいな。話しかけてくるな、気が散る」

「うるさいとか言つてないで、素直に僕の話聞きなよ、教えてあげているのに」

「構うなっ」

ブース内に最多数設置されている中型筐体、その中の一台のゲーム機の前に、彼は座していた。モニターに映じられているコンピュータゲームに興じているのだ。次々飛来する敵の戦闘機を、同じく飛来するパワーアップグッズを奪いながら、打ち落としていくシューティングゲーム。操作パネルの赤いボタンを、タイミングよく連打しなければいけないのだが、彼のゲームの扱いはどうにもぎこちなかった。

彼の座るシートの両脇には、右にセブンス、左にエイツが立っていて、口々にアドバイスを伝えていた。だが、肝心のプレイヤーはまったく言うことを聞かず、何度も訪れるチャンスをもにすることができないでいた。すでにゲームキャラクターは無惨にポイントを減らし、瀕死の状態に陥っている。

「ああ、もうだめだ」

「せっかく教えてあげたのに」

「なんでこっちの話を聞かないんだ？」

「本当だよ。僕らの方がここの先輩なんだから、このゲームのことわかっているのに」

セブンスとエイツは、少年らしい無邪気で遠慮の無い物言いだ騒ぎ立てている。このブースで長期間暮らし、暇に飽かせてゲームをやり倒している二人にしてみれば、彼の操作はあまりにもたどたど

しいのだろう。しかし、彼のような育ち方をした人間が、他人のアドバイスに素直に耳を傾けるとは思えなかった。

「いい加減うるさいっ。やってんのは俺なんだから、好きにさせる。別に、ゲームなんだから、死んだっていいんだし」

案の定癇癪を起こし、声を荒げる。

「何言ってるの？ 次のステージに行けないから、コツを教えてくださいって言ったのはそっちだよ」

セブンスはつぶらな瞳を三角に尖らせた。

「そうだよ。なのに、ちつともこつちの言うこと聞かねえの」

エイツが追い討ちをかける。二人から責められながら、彼はむすつとした顔でボタンを連打する。

彼のような身の上では、高慢な性格に成長しても致し方ないのかもしれない。だが、根は素直な性質だから、行き過ぎたら反省したりすることもある。一度シャワー室で気を失って以降、彼はそれなりに現状を受け入れ、同室の者達ともそこそこうまくやっているように見えていた。それでも、彼が携えている聳え立つほどの自負心は、簡単に他人に折れることをよしとしないのだろう。

そうこうしているうち、とうとうモニターに「GAME OVER」の文字が浮かび上がった。

「あー、終わっちゃったよ」

「結局行けなかったじゃない、次のステージ」

「本当お前らうるさいっ。別にいいんだよ、こんなのできなくたって」

「何？ さっきの態度と随分違う。どうしてもクリアしたいから教えてくれて、自分からお願いしてきたくせに」

「勝手な奴だなっ」

セブンスとエイツは責め続ける。だが、もし彼が心中では自分の非を認めていたとしても、それを口に出すことはないだろう。謝罪を求められるような経験は、今まで一度だって無かったのだから。

納得できない年少組は、とうとう年長組に助け船を求めようと動き出した。

彼が加わったこのグループは、何をするでもなく、いつも寄り集まって毎日を過ごしている。目下も、ずらりと並んだゲーム機の前で、とぐろを巻いていた。年長組の三人は、一台ずつ間隔を空けて、ゲーム機の椅子に座っている。彼の右隣にフォース、そしてセカンド、ファーストという順だ。

ブース内には、この六人グループ以外、他人とコミュニケーションが取れないため、単独で行動している者があと四人いる。他の場所では暮らす者達も、ほとんど単独行動が基本になっている。この六人のように、四六時中行動を共にするようなグループは、この施設では初めて見られる現象だった。だから彼は今、ここにいてもいい。しれない。

年少者達は、一番近くにいたフォースに走り寄り、加勢を求めた。見ていた雑誌のページをめくるのを止めて顔を上げ、フォースはセカンドを指差した。

「そういうのは俺じゃなくて、あっちに言え。調整は俺の役目じゃない」

セブンスとエイツは早速小走りでセカンドに近付き、騒々しく訴えた。

「ねえ、あいつ酷いんだよ。自分で僕達にゲームのやり方を教えてくれて頼んだのに、全然言うことを聞かないし。その上、逆に怒ってくるの」

「あのえらそうな態度はどうかと思う。だって俺達、ずっと一緒にいなきゃならないのに。できるだけ喧嘩しないよう、お互いソUNCHヨウしあわないと駄目でしょ？」

世界の不条理に初めて出会って憤る幼子のように、真剣な抗議を繰り返す二人に、セカンドは読んでいる本から顔も上げずに明言する。

「後で。今、物語が佳境だから」

「本ばかり読んでないで、僕らの話を聞いてよ」

「俺達ちゃんと言いつけられた通り、誰とも問題起こさず、平和に暮らしてるんだからさ。こんな時には、年上がどうにかしてくれてもいいと思う」

食い下がる二人。セカンドは本から視線を動かさないうまま、一台空けた右隣のゲーム機に突っ伏している男を指差した。

「じゃあ、あっちに頼んだ方がいい。あの新入りの担当はあいつだから」

セカンドに突っ撥ねられたセブンスとエイツは、そそくさと移動する。最後の頼みの綱の背後で、餌をねだる雛のようにかまびすしく訴えた。ファーストは眠っているのか、操作パネルの上でぴくりともしない。だが、しばらくは動じなかったその男も、少年達のあまりのしつこさに辟易したのか、突然起き上がり、くるりと振り向いた。

「わかった、わかったよ。だからそう喚くな」

まだ言い足りなさそうな様子の二人を片手で制して、ファーストは椅子から立ち上がった。大きく背伸びをして、気怠げに忠告する。

「お前ら、あんまりあいつに構うなよ、面倒なことになるから」

「構ったわけじゃない。あいつの方から寄ってきたんだ」

「そうだよ。新入りだからって、あいつの肩を持つの？」

「そうじゃないが、あれは変わった奴だから……」

「そんな関係ないでしょ？ 僕らにはいろいろ注意するくせに。」

僕はだから、できるだけいい子でいるようにしているよ。みんなの和を乱すようなことはしない」

「ここにいる以上同じ立場なんだから、同じ対応をしてもらわないと納得できない」

セブンスとエイツは、腰が引けているファーストを追い詰めていく。

「わかったよ。まったくお前ら、こんな時は特に息が合っているな」
ファーストは大きな溜息を吐く。だが、少年達を見る目は、慈し

むように優しくかった。踵を返し、彼が陣取っているゲーム機へ向かった。

訴えられている当事者であるはずの彼は、事の経過を他人事のような目で眺めていた。自分のことでクレームをつけられているというのに、その顔には不満も憤りも表れてはいない。まるで、目の前で起こっている出来事を、画面の中にしか存在しない、手の届かない遠い世界で行われている事態だと認識しているようだ。

「話がある」

ファーストに声をかけられて、彼ははっと夢から覚めたような表情になる。今自分が見ているものの中に自分も存在しているのだと、ようやく気付いた様子だ。覆い被さるように前のめりに立つ、背の高いファーストを見上げ、彼は不遜な顔を作り上げて答えた。

「俺には無いけど」

「いいからちよつと来い」

腕を掴んで引つ張られ、彼は渋々といった様子で立ち上がった。

「行くつて、どこへだよ？」

「あっち」

ぞんざいな口調でファーストは言い、早足で歩き出した。彼は、無然とした顔をしながらも、逆らうことなく付いて行く。

ファーストが向かおうとしているのは、ブースの一番奥、大型ゲーム機が集まるコーナーのようだ。筐体一台々々が大きいので、設置の間隔が広くとられている。

彼らが通路を進む途中、一人、単独行動している住人の姿が見えた。ぼんやりと、浮揚しているかのようにふらふらと歩いていた。ああいった存在は団体行動には向かないが、与えられた指示にはよく従ってくれている。あのような者こそ、ここでは重要な存在だった。

最奥まで来ると、ドライビングシートがずらりと横一列に並んでいた。それは、十人同時に参加できるレーシングゲーム機だった。ファーストはその前に立つと、一台のシートを指差し、「座れ」と

指定した。彼がそこに乗り込むのを待つてから、自分も隣に腰を落ち着ける。

「ゲームのやり方なら俺に聞け。他の奴らと不協和音を起こすくらいなら、その方がいい」

素っ気なくそう言つて、ファーストは操作パネル上の小さなボタンを押した。シート前に設置されたモニターが明るくなり、色鮮やかなグラフィック映像が映る。このゲームはボタンを押すだけで遊び放題だ。

「別に、ゲームがしたいわけじゃない」

彼は顔を顰め、自分の前のモニターにも現れた映像を凝視した。

「ゲームをしたくない？　じゃあ何で、あいつらに教えてくれなんて言つたんだ？」

「だつて……」

彼は俯き、黙り込む。

「何だよ？　はつきり言えよ。うじうじと面倒臭い奴だなあ」

ファーストの見下した口振りが癪に障つたのだろう、彼はモニターを睨み付けながら怒り声を発した。

「俺は……一緒に遊びたかつただけだ……！」

「はあ！？」

ファーストはひどく驚いた様子で、目を丸くして彼を見た。あまりにも意外な言葉だつたのだろう。

「悪いかよ。だつてこんなところで、一人で過ごしたつて退屈だし」

顔は仏頂面だが、彼の声は弱々しかった。この態度が、誇り高い彼が示せる、精一杯の譲歩なのだろう。

啞然としていたファーストの顔が、ふっと緩んだ。さっき年少者達を見た時のような目をして、穏やかな声音で伝える。

「それじゃお前、せめて相手を怒らせたら謝れよ」

「謝る？」

「悪いことをしたら、ごめんって言え。それができたら、お前も仲間と遊べるようになる」

「ごめんって……？」

彼は、生まれて初めて遭遇した珍奇なものを恐る恐る確かめるように、その言葉を繰り返した。

果たして、彼がその言葉を口に出すことがあるだろうか。もしいつか、そのようなことがあったとしたら、それは私にとっても、感慨深い出来事であることは間違いないだろう。

突破

ほんの数メートル先で、猫に似た異様な顔の女達が、死肉に集る蛆虫のようにわらわらと蠢いている。皆月鎌を手に握り、首を狩る獲物が現れるのを今か今かと待ち構えていた。間に障壁が無ければ、きつとすぐにでも襲ってきたはずだ。ここに電磁シールドがあることを、コータはコクーンに来て初めて感謝した。ただあの、この世のものとも思えない恐ろしい姿も隠してくれていれば、もっとありがたかったのだが。

「そういえば切子、あんたどうやってこの中に入ったんだ？ シールドは有効のようなのに」

リュウが聞いてきた。

「ああ。別にシールドを破壊したりはしてないよ。後で面倒なことになるかもしれないからね。これで無効にしかだけ」

切子は腰に巻いているベルトにぶら下がっているヒップバックから、銀色の小型銃を取り出した。

「これは反電磁銃。侵入する時の必需品。撃つと電磁シールドの力を乱して、しばらく無効にすることができる。何十秒かだけだけ」

「そんなものがあるのか」

リュウが驚き顔でそれに注目した。

「これはそう特殊なものではないわよ。ちょっとした武器屋ならどこでも扱っているし。私も持っているわ」背後のナツが口を挟む。

「このシールドは、そんな簡単に無効にできるものなのか」

顔をナツに向け、愕然とした様子でリュウは質問した。

「別にここは、最高の防壁が張られているようなところじゃないから。大切を守るようなものがあるわけじゃないし。だから、侵入しようと思えばそう難しいことじゃないわ。ただ今まで、そんなことをする奴がいなかっただけ。そこのお馬鹿が現れるまで」

ナツは肩を竦め、苦笑いを浮かべて切子を指差した。

切子は当て擦りを無視し、つかつかと靴音高く進み出て、シールドの前で立ち止まった。化け猫達の列は、目と鼻の先だ。

「こいつらを突破しなきゃ、外には出られないわけだ」

「そうね。あなたがあの子達に八つ裂きにされるところが見たいんでしょ、パパは」

振り返った切子の問いに、ナツが答える。

「ふん、気持ち悪い奴。できればああいう輩には関わりたくないんだけど。でも、足を突っ込んだ以上、前進するしかないし」

切子は強かな笑みを浮かべた。

「じゃ私は、ここで高みの見物をさせてもらうわ。ああ、あの子達の元になっているのは私だから、動きのパターンは似てると思うわよ」

「そんなこと教えたら、あいつ怒るんじゃないの？」

切子が驚き顔で聞いた。

「かもね」

ナツのきれいな紡錘型の目が、憂いを含んで伏せられた。切子の眉が顰められ、何か言おうとしたのか、唇が動く。だが結局、言葉が発されることはなかった。立ち尽くしている背後の二人に、切子の視線が移る。

「これからここを突破する」

平坦な声で切子が宣言する。恐ろしい光景を目の当たりにして凍り付いていたコータは、この信じ難い台詞のせいで現実に引き戻された。

「何だって!？」思わず声が出た。

「逃げ道はここしかないし、いろいろ考えても時間の無駄だから」

切子はまるで容易いことのように言う。

「あんな化け物が群れ成して作っている壁を、どうやって越えるって言うんだ……」

コータの心は完全にくじけていた。助かりたいのは山々だが、あ

れほどの数の敵を倒して逃げることは、到底思えなかった。

「あんたにはこれ貸してあげる」

切子は腰に巻いたガンベルトのホルスターを開け、銃を引き抜いて放り投げた。きれいな曲線を描いて手元にまで届いたそれを、思わず前に出してしまった両手で、コータは受け止めた。

「それ、小型だけど散弾銃だし、実弾が出るクラシックなタイプだから、殺傷能力は高いよ」

恐ろしいことを話されて総毛立ったコータは、手にした黒い塊を取り落としそうになった。

「俺にこれを撃てって言うのか」声が震える。

「大体私がやるつもりだけど、あいつら数が多いんで、そっちに手が回らないことがあるかもしれないから。さっき、基本的に自分の身は自分で守れて言ったよね」

「俺こんなもの、使ったことない……」

「助かりたいんでしょ？ 引き金を引けば弾は出るよ。撃つ時は両足を踏ん張って反動に気をつけて。別に難しいことじゃないでしょ？ それ、安全装置自動になってるから」

コータは怯えながらも、両手で銃のグリップを握り締めた。助かるためには、切子の言うことを受け入れるしかないのだ。

「そっちは？」

切子はリュウに視線を移した。

「ソルジャー型だってことだけど、あんたにも飛び道具渡そうか？」

「いらない」

リュウは即座に答えた。

「久々だが、多分それなりにやれる」

リュウは泰然としていた。まるでこれから、日課の散歩に行こうとでもしているかのように。それは、この状況に凛凛としているコータには癪に障る態度だった。リュウと比べて臆病者に見られたくなく、同じような平然とした表情を作ろうと、今にも叫び出してしまいそ

うな恐怖を押さえ付け、コータは唇の両端を持ち上げた。無理矢理作った笑顔は引きつり、頬がぴくぴくと震えてしまう。

「じゃ、後は進むだけだ」

笑いを含んだ切子の声。コータが強ばった首を縦に振ると、勢いよく近付いてきて、指示を始める。

「シールドを無効にしたと同時に、私が化け猫達に斬りかかり、突破口を作る。あんたらはすぐ後ろから付いて来て。できるだけ多く倒すようにするけど、何しろあいっら数が多くて横に広がっているから、取りこぼしはかなりあると思う。そういうのをなんとかするのがあんた達の役目だから。よろしく」

コータはごくりと唾を飲み込んだ。

「じゃ行くよ。こんなの、時間が経てば経つほど向こうに有利になるだけだから」

そう言ってくるりと踵を返し、切子は再び鋭い靴音を響かせてシールドの前に進み出る。コータとリュウは、急いでその後続いた彼女の今の言述が、自分にとって死刑宣告になったりしませんようにと、コータは心の中で祈った。

「がんばって！」

背後から、ナツの無責任な声援。

切子が反電磁銃を取り出し、前に向ける。

「俺の側から離れるな」

コータは、耳元で低く囁くりユウの声を聞いた。

シューツと、小さな摩擦音のような音が鳴った。それが、戦闘の合図だった。

「行くよっ」

鋭い声と共に、切子が刀を抜いて飛び出した。一斉に獣面の女達が、彼女を葬り去ろうと前に出る。

シールドは取り払われてしまった。もう後は、なるようになるしかない。コータは恐怖に強ばりながらも、遅れを取らないよう、必死で切子の背中を追った。

刀が閃く。前方から襲いかかろうとしていた女が三人、血を吹き出しながらどつと崩れた。切子がたった一薙ぎで、一気に倒したのだ。女達は、きっと自分の身に何が起こったかわからなかっただろう。それほどのスピードだった。

その一刀を挨拶代わりに、切子は電光石火のごとく次々と攻撃を繰り返した。ハチドリを思わせる、あまりに素早い動きから残像が生じ、右手に持つ小型の刀が腕と一体化しているように見えた。くるくると独楽のように回り、敵をたちまちその渦の中に巻き込み倒しながら、前進していく。切り込まれた女達は恐れをなして浮き足立ち、半月形の陣を成して、じりじりと後退していく。

切子は強い！ その確信に、コートの中に希望が蘇った。彼女に比べると、化け猫達の動きは亀のように鈍かった。敵の思わぬ強さに明らかに戸惑っている烏合の群の中に、切子は容赦なく斬り込んでいく。

生温い春の雨のとき血飛沫が、辺りを朱に染めていく。コート顔にも服にも、それは振りかかってくる。しかし、不思議と嫌悪感は湧いてこなかった。目の前で行われている惨劇は、とても魅惑的だったのだ。

切子の刀捌きは華麗だった。滑らかでしなやか、そして羽を思わせるほどに軽い。まるで神に捧げる舞踏を見ているかのようだ。切子は体を回転させながら、同時に刀を振り回す。剣術と拳法を合体させたような動作に、彼女の持つ人並み外れた運動能力を感じさせられた。

右前から鎌を振り下ろしてくる相手をひらりと避け、同時に横にいた敵の喉を突いた。左前の女の腕を払い落とし、逆側の女の腹を割く。赤子の手を捻るように容易く、化け物達を葬っていく。

女達の血に塗れながら回る切子の姿は、鬼神を思い起こさせた。その動きには人を惑わす美しさがあり、コートは目を奪われ、いつの間にか恐怖心さえ消え失せていた。彼は、自分が彼女の舞踏を見ている、観客の一人であるような気になっていた。

だが

「ぼけつとするなっ」

鋭い声が飛び、コータは背後から服を引っ張られ、よろめいた。はっと我に返ると、リュウがコータの前に立ち塞がっていた。知らぬ間に、切子の刀を免れた女達が両脇から迫ってきていたのだ。

リュウは左から最初に襲いかかってきていた化け猫女の腕を掴むと、軽々と背負い、右側から飛びかかるうとした女達に投げつけた。そして、次々と振り下ろされる月鎌を俊敏に避け、近付いて来る女達の腹に正拳を突き入れる。リュウが敵を難なく排除してくれるので、コータは手にした銃を構える必要もなかった。

その一目で並じゃないことがわかる訓練された動きに驚愕しつつも、コータは何だか面白くなかった。それに、合点がいかなかった。最初に女達が襲ってきた時、リュウは仲間を助けようとせず、コータと共に逃げたのだ。こんなに強いのなら、少しは抵抗すればよかったのではないか……？

「お前何者だ！？」

「戦士型」

コータの問いに、リュウは敵の腕を捻り上げながら答えた。

「だから何なんだよ、それは！？」

「そんなことは後だ。お前はこんなところで死にたいのか」

冷静な声調で言われ、コータは言葉に詰まる。確かに今は、切子の獅子奮迅の活躍の前に化け物どもの攻撃は鈍い。見回すとほとんどの者が、月鎌を構えたまま恐れをなし、身動きできずにいる。切子の桁外れの強さのお陰で、女達の壁はかなり後退していた。だが、この優位がいつまで続くのか。先制攻撃に成功しているとはいえ、敵は百人以上、対してこちらは三人だけだ。どう見積もっても勝ち目の無さそうなその人数の前で、切子がほとんど一人で奮闘しているのだ。いくら強靱な者でも、この圧倒的な戦力の差の前では、いつかは消耗してしまう。案外化け者達は、それを狙って性急に攻撃を仕掛けてこないのかもしれない。真っ向勝負で敵わない相手なら、

弱ったところを一気に叩くのが上策だろう。

今のところ、切子に疲れの兆しはない。右に左に軽やかに動き、攻めようとする女達を次々と屠っていた。だが、彼女の体力がどこまで持つのか。いずれ必ず、疲労という最大の敵に襲われる時がやってくる。そうなれば、切子の刃を逃れてコータ達を強襲する敵の数は、今よりもっと膨れ上がるだろう。差し当たりリュウ一人で化け猫達を打ち止めているが、いずれ必ず、自分も戦わなくてはならなくなる。それはわかっているのだが、コータは強張る手に握られている銃を見るだけで大きな不安と恐怖に飲み込まれ、気絶しそうだった。

その時

「遊びは終わり！」

突然切子が声を上げる。そしてくるりと踵を返し、「ブースに戻れ！」と叫び、刀を鞘に収めながら走ってきた。

コータは慌てた。切子は彼のすぐ横を駆け抜けながら、ヒップバックから反電磁銃を取り出し、シールドに向かって撃った。

その唐突な後退が、一瞬、化け猫達の足をその場に引き留める。

「早く！」

どうやら、切子はブースの中に入れと言っているらしい。戸惑っているコータの腕をリュウが掴み、二人は切子が無効にしたシールドを越える。すぐに切子も続いた。

「伏せろっ」

切子が叫ぶ。

コータはリュウに飛びかかれ、床に倒れ込んだ。体の上に覆い被さられて、息ができずにもがいた時、
耳が潰れそうな爆発音が轟いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5433o/>

パラダイス・パラダイム

2011年5月4日02時10分発行